

れて遣らなかつた。僅ばかりでも彼が月給を取るやうになつたのは、養父母に取つて寧ろ僥倖と云はなければならなかつた。健三は姉の不平に對して眼に見えるほどの注意を拂ひかねた。昔し死んだ赤ん坊については、猶の事同情が起らなかつた。彼は其生顔を見た事がなかつた。其死顔も知らなかつた。名前さへ忘れてしまつた。

「何とか云ひましたね、あの子は」

「作太郎さ。あすこに位牌があるよ」

姉は健三のために茶の間の壁を切り抜いて拵へた小さい佛壇を指し示した。薄暗いばかりでなく小汚ない其中には先祖からの位牌が五つ六つ竝んでゐた。

「あの小さい奴がさうですか」

「あゝ、赤ん坊のだからね、わざと小さく拵へたんだよ」

立つて行つて戒名を讀む氣にもならなかつた健三は、矢張故の所に坐つた儘、黒塗の上に金字で書いた小形の札のやうなものを遠くから眺めてゐた。

彼の顔には何の表情もなかつた。自分の二番目の娘が赤痢に罹つて、もう少して命を奪られる

所だつた時の心配と苦痛さへ聯想し得なかつた。

「姉さんも斯んなぢや何時あゝなるか分らないよ、健ちゃん」

彼女は佛壇から眼を放して健三を見た。健三はわざと其視線を避けた。

心細い事を口にしたながら腹の中では決して死ぬと思つてゐない彼女の云ひ草には、世間並の年寄と少し趣を異にしてゐる所があつた。漫性の病氣が何時迄も繼續するやうに、漫性の壽命が又何時迄も繼續するだらうと彼女には見えたのである。

其處へ彼女の痛性が手傳つた。彼女は何んなに氣息苦しくつても、いくら他から忠告されても、何うしても居ながら用を足さうと云はなかつた。這ふやうにしても厠迄行つた。それから子供の時からの習慣で、朝は屹度肌抜になつて手水を遣つた。寒い風が吹かうが冷たい雨が降らうが決して已めなかつた。

「そんな心細い事を云はずに、出来る丈養生をしたら好いでせう」

「養生はしてゐるよ。健ちゃんから貰ふ御小遣ひの中で牛乳丈は屹度飲む事に極めてゐるんだから」

田舎ものが米の飯を食ふやうに、彼女は牛乳を飲むのが凡ての養生でもあるかのやうな事を云つた。日に／＼損はれて行く吾健康を意識しつゝ、此姉に養生を勧める健三の心の中にも、「他事ぢやない」といふ馬鹿らしさが遠くに働いてゐた。

「私も近頃は具合が悪くつてね。ことによると貴方より早く位牌になるかも知れませんが」彼の言葉は無論根のない笑談として姉の耳に響いた。彼もそれを承知の上でわざと笑つた。然し自ら健康を損ひつゝあると確に心得ながら、それを何うする事も出来ない境遇に置かれた彼は、姉よりも却て自分の方を憐んだ。

「己のは黙つて成し崩しに自殺するのだ。氣の毒だと云つて呉れるものは一人もありやしない」彼はさう思つて姉の凹み込んだ眼と、瘦けた頬と、肉のない細い手とを、微笑しながら見てゐた。

六十九

姉は細い所に氣の付く女であつた。従つて細い事に迄よく好奇心を働かせたが。一面に於

て馬鹿正直な彼女は、一面に於てまた變な廻り氣を出す癖を有つてゐた。

健三が外國から歸つて來た時、彼女は自家の生計に就て、他の同情に訴へ得るやうな憐れつぽい事實を彼の前に竝べた。仕舞に兄の口を借りて、若干でも好いから月々自分の小遣として送つて呉れまいかといふ依頼を持ち出した。健三は身分相應な額を定めた上、また兄の手を経て先方へ其旨を通知して貰ふ事にした。すると姉から手紙が來た。長さんの話では御前さんが月々若干若干私に遣るといふ事だが、實際御前さんの、呉れると云つた金高は何の位なのか、長さんに内所で一寸知らせて呉れないかと書いてあつた。姉は是から毎月中取次をする役に當るかも知れない兄の心事を疑ぐつたのである。

健三は馬鹿々々しく思つた。腹立しくも感じた。然し何より先に淺間しかつた。「黙つてゐろ」と怒鳴り付けて遣りたくなつた。彼の姉に宛てた返事は、一枚の端書に過ぎなかつたけれども、斯うした彼の氣分を能く現はしてゐた。姉はそれぎり何とも云つて來なかつた。無筆な彼女は最初の手紙さへ他に頼んで書いて貰つたのである。

此出來事が健三に對する姉を前よりは一層遠慮がちにした。何でも蚊でも訊きたがる彼女も、

健三の家庭に就ては、當り障りのない事の外、多く口を開かなかつた。健三も自分等夫婦の間柄を彼女の前で問題にしやうなどは曾て想ひ到らなかつた。

「近頃お住さんは何うだい」

「まあ相變らずです」

會話は此位で切り上げられる場合が多かつた。

間接に細君の病氣を知つてゐる姉の質問には、好奇心以外に、親切から來る懸念も大分交つてゐた。然し其懸念は健三に取つて何の役にも立たなかつた。従つて彼女の眼に見える健三は、何時も親しみがたい無愛想な變人に過ぎなかつた。

淋しい心持で、姉の家を出た健三は、足に任せて北へくと歩いて行つた。さうしてつひぞ見た事もない新開地のやうな汚ない、町の中へ入つた。東京で生れた彼は方角の上に於て、自分の今踏んでゐる場所を能く辨へてゐた。けれども其處には彼の追憶を誘ふ何物も残つてゐなかつた。過去の記念が悉く彼の眼から奪はれてしまつた大地の上を、彼は不思議さうに歩いた。

彼は昔あつた青田と、其青田の間を走る眞直な徑を思ひ出した。田の盡る所には三四軒の藪

葦屋根が見えた。菅笠を脱いで床几に腰を掛けながら、心太を食つてゐる男の姿などが眼に浮んだ。前には野原のやうに廣い紙漉場があつた。其處を折れ曲つて町つゞきへ出ると、狭い川に橋が懸つてゐた。川の左右は高い石垣で積み上げられてゐるので、上から見下す水の流れには存外の距離があつた。橋の袂にある古風な錢湯の暖簾や、其隣の八百屋の店先に竝んでゐる唐茄子などが、若い時の健三によく廣重の風景畫を聯想させた。

然し今では凡てのものが夢のやうに悉く消え失せてゐた。残つてゐるのはたゞ大地ばかりであつた。

「何時斯んなに變つたんだらう」

人間の變つて行く事にのみ氣を取られてゐた健三は、それよりも一層劇しい自然の變り方に驚かされた。

彼は子供の時分比田と將基を差した事を偶然思ひだした。比田は盤に向ふと、是でも所澤の藤吉さんの御弟子だからなと云ふのが癖であつた。今の比田も將基盤を前に置けば、屹度同じ事を云ひさうな男であつた。

「己自身は畢竟何うなるのだらう」

衰へる丈で案外變らない人間のさまと、變るけれども日に榮えて行く郊外の様子とが、健三に思ひがけない對照の材料を興へた時、彼は考へない譯に行かなかつた。

七十

元氣のない顔をして宅へ歸つて來た彼の様子がすぐ細君の注意を惹いた。

「御病人は何うなの」

あらゆる人間が何時か一度は到着しなければならぬ最後の運命を、彼女は健三の口から判然聞かうとするやうに見えた。健三は答を興へる先に、まづ一種の矛盾を意識した。

「何もう好いんだ。寐てはゐるが危篤でも何でもないんだ。まあ兄貴に騙されたやうなものだね」

馬鹿らしいといふ氣が幾分か彼の口振に出た。

「騙されても其方がいくらか好いか知れやしませんわ、貴夫。若しもの事でもあつて御覽なさい、

それこそ……」

「兄貴が悪いんぢやない。兄貴は姉に騙されたんだから。其姉は又病氣に騙されたんだ。つまり皆な騙されてゐるやうなものさ、世の中は。一番利口なのは比田かも知れないよ。いくら女房が煩つたつて、決して騙されないんだからね」

「矢つ張宅にゐないの」

「居るもんか。尤も非道く悪かつた時は何うだか知らないが」

健三は比田の振ら下げてゐる金時計と金鎖の事を思ひ出した。兄はそれを天獄羅だらうと云つて陰で評してゐたが、當人は何處迄も本物らしく見せびらかしたがつた。金着せにせよ、本物にせよ、彼が何處で幾何で買つたのか知るものは誰もなかつた。斯ういふ點に掛けては無頓着でゐられない性分の姉も、たゞ好い加減に其出處を推察するに過ぎなかつた。

「月賦で買つたに違ないよ」

「ことによると質の流れかも知れない」

姉は聽かれもしないのに、兄に向つて色々な説明をした。健三には殆ど問題にならない事が、

彼等の間に想像の種を幾個でも卸した。左右され、ばされる程又比田は得意らしく見えた。健三が毎月送る小遣さへ時々借りられてしまふ癖に、姉はつひに夫の手元に入る、又は現在手元にある、金高を決して知る事が出来なかつた。

「近頃は何でも債券を二三枚持つてゐるやうだよ」

姉の言葉は丸で隣の宅の財産でも云ひ中るやうに夫から遠ざかつてゐた。

姉を斯ういふ地位に立たせて平氣でゐる比田は、健三から見ると領解しがたい人間に違なかつた。それが已を得ない夫婦關係のやうに心得て辛抱してゐる姉自身も健三には分らなかつた。然し金銭上飽く迄秘密主義を守りながら、時々姉の豫期に釣り合はないやうなものを買ひ込んだり着込んだりして、妄りに彼女を驚かせたがる料簡に至つては想像さへ及ばなかつた。妻に對する虚榮心の發現、焦らされながらも夫を腕利と思ふ妻の満足。——此二つのもの丈では到底十分な説明にならなかつた。

「金の要る時も他人、病氣の時も他人、それぢやたゞ一所にゐる丈ぢやないか」

健三の謎は容易に解けなかつた。考へる事の嫌ひな細君はまた何といふ評も加へなかつた。

「然し已達夫婦も世間から見れば随分變つてゐるんだから、さう他の事ばかり兎や角云つちやゐられないかも知れない」

「矢つ張り同なじ事ですわ。みんな自分丈は好いと思つてゐるんだから」

健三はすぐ癪に障つた。

「お前でも自分ぢや好い積でゐるのかい」

「おますとも。貴夫が好いと思つてゐらつしやる通りに」

彼等の争ひは能く斯ういふ所から起つた。さうして折角穩かに靜まつてゐる雙方の心を攪き亂した。健三はそれを慎みの足りない細君の責に歸した。細君はまた偏窟で強情な夫の所爲だとばかり解釋した。

「字が書けなくつても、裁縫が出来なくつても、矢つ張姉のやうな亭主孝行な女の方が已は好きだ」

「今時そんな女が何處の國にゐるもんですか」

細君の言葉の奥には、男ほど手前勝手なものはないといふ大きな反感が横はつてゐた。

筋道の通つた頭を有つてゐない彼女には存外新しい點があつた。彼女は形式的な昔風の倫理觀に囚はれる程嚴重な家庭に人とならなかつた。政治家を以て任じてゐた彼女の父は、教育に關して殆ど無定見であつた。母は又普通の女の様に八釜しく子供を育て上る性質でなかつた。彼女は宅にゐて比較的自由な空気を呼吸した。さうして學校は小學校を卒業した丈であつた。彼女は考へなかつた。けれども考へた結果を野性的に能く感じてゐた。

「單に夫といふ名前が付いてゐるからと云ふ丈の意味で、其人を尊敬しなくてはならないと強ひられても自分には出来ない。もし尊敬を受けたければ、受けられる丈の實質を有つた人間になつて自分の前に出て來るが好い。夫といふ肩書などは無くつても構はないから」

不思議にも學問をした健三の方は此點に於て却つて舊式であつた。自分は自分の爲に生きて行かなければならないといふ主義を實現したがりがら、夫の爲にのみ存在する妻を最初から假定して憚らなかつた。

「あらゆる意味から見て、妻は夫に従屬すべきものだ」

二人が衝突する大根は此處にあつた。

夫と獨立した自己の存在を主張しやうとする細君を見ると健三はすぐ不快を感じた。動ともすると、「女の癖に」といふ氣になつた。それが一段劇しくなると忽ち「何を生意氣な」といふ言葉に變化した。細君の腹には「いくら女だつて」といふ挨拶が何時でも貯へてあつた。

「いくら女だつて、さう踏み付にされて堪まるものか」

健三は時として細君の顔に出る是丈の表情を明かに讀んだ。

「女だから馬鹿にするのではない。馬鹿だから馬鹿にするのだ、尊敬されたければ尊敬される丈の人格を拵へるがよい」

健三の論理は何時の間にか、細君が彼に向つて投げる論理と同じものになつてしまつた。

彼等は斯くして圓い輪の上をぐる／＼廻つて歩いた。さうしていくら疲れても氣が付かなかつた。

健三は其輪の上にはたりと立ち留る事があつた。彼の留る時は彼の激昂が靜まる時に外ならな

かつた。細君は其輪の上で不圖動かなくなる事があつた。然し細君の動かなくなる時は彼女の沈滞が融け出す時に限つてゐた。其時健三は漸く怒號を已めた。細君は始めて口を利き出した。二人は手を携へて談笑しながら、矢張り圓い輪の上を離れる譯に行かなかつた。細君が産をする十日ばかり前に、彼女の父が突然健三を訪問した。生憎留守だつた彼は、夕暮に歸つてから細君に其話を聞いて首を傾むけた。

「何か用でもあつたのかい」

「え、少し御話ししたい事があるんですつて」

「何だい」

細君は答へなかつた。

「知らないのかい」

「え、また二三日うちに上つて能く御話をするからつて歸りましたから、今度參つたら直に聞いて下さい」

健三はそれより以上何も云ふ事が出来なかつた。

久しく細君の父を訪ねないでゐた彼は、用事のあるなしに拘はらず、向ふがわざ／＼此方へ出掛けて來やうなどと夢にも豫期しなかつた。その不審が例より彼の口數を多くする原因になつた。それとは反對に細君の言葉は却つて常よりも少かつた。然しそれは彼がよく彼女に於て發見する不平や無愛嬌から來る寡言とも違つてゐた。

夜は何時の間にやら全くの冬に變化してゐた。細い燈火の影を凝と見詰めてゐると、灯は動かないで風の音丈が烈しく雨戸に當つた。ひゆう／＼と樹木の鳴るなかに、夫婦は靜かな洋燈を間に置いて、しばらく森と坐つてゐた。

七十二

「今日父が來ました時、外套がなくつて寒さうでしたから、貴方の古いのを出して遣りました」
田舎の洋服屋で拵へた其二重廻しは、殆ど健三の記憶から消えかゝつてゐる位古かつた。細君が何うしてまたそれを彼女の父に與へたものか、健三には理解出来なかつた。

「あんな汚らしいもの」

彼は不思議といふよりも寧ろ恥かしい氣がした。

「いゝえ。喜んで着て行きました」

「御父さんは外套を有つてゐないのかい」

「外套どころぢやない、もう何にも有つちやゐないんです」

健三は驚いた。細い灯に照された細君の顔が急に憐れに見えた。

「そんなに窮つてゐるのかなあ」

「えゝ。もう何うする事も出来ないんですつて」

口数の寡ない細君は、自分の生家に關する詳しい話を今迄夫の耳に入れずに通して來たのである。職に離れて以來の不如意を薄々知つてゐながら、まさか是程とも思はずにゐた健三は、急に眼を轉じて其人の昔を見なければならなかつた。

彼は絹帽にフロックコートで勇ましく官邸の石門を出て行く細君の父の姿を鮮やかに思ひ浮べた。堅木を久の字形に切り組んで作つた其玄關の床は、つる／＼光つて、時によると馴れない健三の足を滑らせた。前に廣い芝生を控へた應接間を左へ折れ曲ると、それと接續して長方形の食

堂があつた。結婚する前健三は其處で細君の家族のものと一緒に晚餐の卓に着いた事を未だに覚えてゐた。二階には疊が敷いてあつた。正月の寒い晩、歌留多に招かれた彼は、そのうちの一間で暖かい宵を笑ひ聲の裡に更した記憶もあつた。

西洋館に續いて日本建も一棟付いてゐた此屋敷には、家族の外に五人の下女と二人の書生が住んでゐた。職務柄客の出入の多い此家の用事には、それ丈の召仕が必要かも知れなかつたが、もし經濟が許さないとすれば、其必要も充たされる筈はなかつた。

健三が外國から歸つて來た時ですら、細君の父は左程困つてゐるやうには見えなかつた。彼が駒込の奥に住居を構へた當座、彼の新宅を訪ねた父は、彼に向つて斯う云つた。――

「まあ自分の宅を有つといふ事が人間には何うしても必要ですね。然しさう急にも行くまいから、それは後廻しにして、精々貯蓄を心掛けたら好いでせう。二三千圓の金を有つてゐないと、いざといふ場合に、大變困るもんだから。なに千圓位出來ればそれで結構です。それを私に預けて御置きなされると、一年位経つうちには、ちき倍にして上げますから」

貨殖の道に心得の足りない健三は其時不思議の感に打たれた。

「何うして一年のうちに千圓が二千圓になり得るだらう」
 彼の頭では此疑問の解決が迎も付かなかつた。利慾を離れる事の出来ない彼は、驚愕の念を以て、細君の父にのみあつて、自分には全く缺乏してゐる、一種の怪力を眺めた。しかし千圓拵へて預ける見込の到底付かない彼は、細君の父に向つて其方法を訊く氣にもならずについ今日迄過ぎたのである。

「そんなに貧乏する筈がないだらうぢやないか。何ぼ何だつて」

「でも仕方がありませんわ、廻り合せだから」

産といふ肉體の苦痛を眼前に控へてゐる細君の氣息遣はたゞでさへ重々しかつた。健三は黙つて氣の毒さうな其腹と、光澤の悪い其頬とを眺めた。

昔し田舎で結婚した時、彼女の父が何處からか浮世繪風の美人を描いた下等な團扇を四五本買つて持つて來たので、健三は其一本をぐる／＼廻しながら、随分俗なものだと評したら、父はすぐ「所相應だらう」と答へた事があつたが、健三は今自分が其地方で作つた外套を細君の父に遣つて、「阿爺相應だらう」といふ氣には逆もなれなかつた。いくら困つたつて彼んなものをもと思ふ

と寧ろ情なくなつた。

「でもよく着られるね」

「見つともなくつても寒いよりは好いでせう」

細君は淋しさうに笑つた。

七十三

中一日置いて彼が來た時、健三は久し振で細君の父に會つた。

年輩から云つても、經歷から見ても、健三より遙に世間馴れた父は、何時も自分の娘婿に對して鄭寧であつた。或時は不自然に陥る位鄭寧過ぎた。然しそれが彼を現はす凡てではなかつた。裏側には反對のものが所々に起伏してゐた。

官僚式に出來上つた彼の眼には、健三の態度が最初から頗る横着に見えた。超えてはならない階段を無様に飛び越すやうにも思はれた。其上彼は無暗に自ら任じてゐるらしい健三の高慢ちな所を喜ばなかつた。頭にある事を何でも口外して憚らない健三の無作法も氣に入らなかつた。

亂暴とより外に取りやうのない一徹一圖な點も非難の標的になつた。

健三の稚氣を輕蔑した彼は、形式の心得もなく無茶苦茶に近付いて來やうとする健三を表面上鄭重な態度で遮つた。すると二人は其處で留まつたなり動けなくなつた。二人は或る間隔を置いて、相手の短所を眺めなければならなかつた。だから相手の長所も判明と理解する事が出來惡くなつた。さうして二人共自分の有つてゐる缺點の大部分には決して氣が付かなかつた。

然し今の彼は健三に對して疑ひもなく一時的の弱者であつた。他に頭を下げる事の嫌ひな健三は窮迫の結果、餘儀なく自分の前に出て來た彼を見た時、すぐ同じ眼で同じ境遇に置かれた自分を想像しない譯に行かなかつた。

「如何にも苦しいだらう」

健三は此一念に制せられた。さうして彼の持ち來した金策談に耳を傾けた。けれども好い顔はし得なかつた。心のうちでは好い顔をし得ない其自分を呪つてゐた。

「金の話だから好い顔が出來ないんぢやない。金とは獨立した不愉快の爲に好い顔が出來ないのです。誤解しては不可せん。私は斯んな場合に敵討をするやうな卑怯な人間とは違ます」

細君の父の前に是丈の辯解がしたくつて堪らなかつた健三は、黙つて誤解の危険を冒すより外に仕方がなかつた。

此ぶつきら棒な健三に比べると、細君の父は餘程鄭重であつた。又落付いてゐた。傍から見れば遙に紳士らしかつた。

彼は或人の名を擧げた。

「向うでは貴方を知つてるといひますが、貴方も知つてゐるんでせうね」

「知つてゐます」

健三は昔し學校にゐた時分に其男を知つてゐた。けれども深い交際はなかつた。卒業して獨逸へ行つて歸つて來たら、急に職業がへをして或大きな銀行へ入つたとか人の噂に聞いた位より外に、彼の消息は健三に傳はつてゐなかつた。

「まだ銀行にゐるんですか」

細君の父は點頭いた。然し二人が何處で何う知り合になつたのか、健三には想像さへ付かなかつた。又それを詳しく訊いて見た所が仕方がなかつた。要點はたゞ其人が金を貸してくれるか、呉

れないかの問題にあつた。

「で當人の云ふには、貸しても好い、好いが慥な人を證人に立て、貰ひたいと斯ういふんです」

「成程」

「ぢや誰を立てたら好いのかと聞くと、貴方ならば貸しても好いと、向ふでわざ／＼指名した譯なんです」

健三は自分自身を慥なものとするには躊躇しなかつた。然し自分自身の財力に乏しい事も職業の性質上他に知れてゐなければならぬ筈だと考へた。其上細君の父は實際範圍の極めて廣い人であつた。平生彼の口にする知合のうちには、健三より何の位世間から信用されて好いか分らない程有名な人がいくらでもゐた。

「何故私の判が必要なんでせう」

「貴方なら貸さうと云ふのです」

健三は考へた。

七十四

彼は今日迄證書を入れて他から金を借りた経験のない男であつた。つい義理で判を捺して遣つたのが本で、立派な腕を有ちながら、生涯社會の底に沈んだ儘、藻掻き通しに藻掻いてゐる人の話は、いくら迂濶な彼の耳にも屢傳へられてゐた。彼は出来るなら自分の未來に關はるやうな所作を避けたいと思つた。然し頑固な彼の半面には至つて氣の弱い養え切らない或物が能く働きたがつた。此場合斷然連印を拒絶するのは、彼に取つて如何にも無情で、冷刻で、心苦しかつた。

「私でなくつちや不可いのでせうか」

「貴方なら好いといふんです」

「何うも變です」

世事に疎い彼は、細君の父が何處へ頼んでも、もう判を押して呉れるものがないので、しまひに仕方なしに彼の所へ持つて來たのだといふ明白な事情さへ推察し得なかつた。彼は親しく交際

つた事もない其銀行家から夫程信用されるのが却つて怖くなつた。

「何んな目に逢はされるか分りやしない」

彼の心には未來に於る自己の安全といふ懸念が十分に働いた。同時にたゞ夫丈の利害心で此問題に片付けてしまふ程彼の性格は單純に出來て居なかつた。彼の頭が彼に適當な解決を與へる迄彼は逡巡しなければならなかつた。其解決が最後に來た時ですら、彼はそれを細君の父の前に持ち出すのに多大の努力を拂つた。

「印を捺す事は何うも危険ですから已めたいと思ひます。然し其代り私の手で出来る丈の金を調へて上げませう。無論貯蓄のない私の事だから、調へるにした所で、どうせ何處からか借りるより外に仕方がないのですが、出来るなら證文を書いたり判を押したりするやうな形式上の手續きを踏む金は借りたくないのです。私の有つてゐる狭い交際の方面で安全な金を工面した方か私には心持が好いのですから、まづ其方の方を一つ中つて見ませう。無論御入用丈の額は駄目です。私の手で調へる以上、私の手で返さなければならぬのは無論の事ですから、身分不相當の借金は出來ません」

幾何でも融通が付けば付いた丈助かるといつた風の苦しい境遇に置かれた細君の父は、それより以上健三を強ひなかつた。

「何うぞ夫ぢや何分」

彼は健三の着古した外套に身を包んで、寒い日の下を歩いて歸つて行つた。書齋で話を濟ませた健三は、玄關から又同じ書齋に戻つたなり細君の顔を見なかつた。細君も父を玄關に送り出した時、夫と竝んで沓脱の上に立つた丈で、遂に書齋へは入つて來なかつた。金策の事は黙々のうちに二人に了解されてゐながら、遂に二人の間の話題に上らずにしまつた。

けれども健三の心には既に責任の荷があつた。彼はそれを果すために動かなければならなかつた。彼は世帯を持つときに、火鉢や煙草盆を一所に買つて歩いて貰つた友達の宅へ又出掛けた。

「金を貸して呉れないかね」

彼は藪から棒に質問を掛けた。金などを有つてゐない友達に驚いた顔をして彼を見た。彼は火鉢に手を翳しながら友達の前に逐一事情を話した。

「何うだらう」

三年間支那のある學堂で教鞭を取つてゐた頃に蓄へた友達の金は、みんな電鐵か何かの株に變形してゐた。

「ぢや清水に頼んで見て呉れないか」

友達の妹婿に當る清水は、下町の可なり繁華な場所、病院を開いてゐた。

「さあ何うかなあ。彼奴も其位な金はあるだらうが、動かせるやうになつてゐるかしら。まあ

訊いて見てやらう」

友達の好意は幸ひ徒勞にならずに濟んだ。健三の借り受けた四百圓の金が、細君の父の手に入つたのは、それから四五日経つて後の事であつた。

七十五

「己は精一杯の事をしたのだ」

健三の腹には斯ういふ安心があつた。従つて彼は自分の調達した金の價値に就いて餘り考へなかつた。嘸嬉しがらるだらうとも思はない代りに、是位の補助が何の役に立つものかといふ氣も起

さなかつた。それが何の方面に何う消費されたかの問題になると、全くの無智識で澄ましてゐた。細君の父も其處迄内情を打ち明ける程彼に接近して來なかつた。

従來の牆壁を取り拂ふには此機會があまりに脆弱過ぎた。若しくは二人の性格があまりに固着し過ぎてゐた。

父は健三よりも世間的に虚榮心の強い男であつた。成るべく自分を他に能く了解させようと力めるよりも、出来るだけ自分の價値を明るい光線に觸てさせたがる性質であつた。従つて彼を圍繞する妻子近親に對する彼の様子は幾分か誇大に傾きがちであつた。

境遇が急に失意の方面に一轉した時、彼は自分の平生を顧みない譯に行かなかつた。彼はそれを糊塗するため、健三に向つて能ふ限り左あらぬ態度を装つた。それで遂に押し通せなくなつた揚句、彼はとう／＼健三に連印を求めたのである。けれども彼が何の位の負債に何う苦しめられてゐるかといふ巨細の事實は、遂に健三の耳に入らなかつた。健三も訊かなかつた。

二人は今迄の距離を保つた儘で互に手を出し合つた。一人が渡す金を一人が受け取つた時、二人は出した手を又引き込めた。傍でそれを見てゐた細君は黙つて何とも云はなかつた。

健三が外國から歸つた當座の二人は、まだ是程に離れてゐなかつた。彼が新宅を構へて間もない頃、彼は細君の父がある鑛山事業に手を出したといふ話を聞いて驚いた事があつた。

「山を掘るんだつて？」

「え、何でも新らしく會社を拵へるんださうです」

彼は眉を擡めた。同時に彼は父の怪力に幾分かの信用を置いてゐた。

「旨く行くのかね」

「何うですか」

健三と細君との間に斯んな簡単な會話が取り換はされた後、彼はその用事を帯びて北國のある都會へ向けて出發したといふ父の報知を細君から受け取つた。すると一週間ばかりして彼女の母が突然健三の所へ遣つて來た。父が旅先で急に病氣に罹つたので、是から自分も行かなければならないと思ふが、それに就いて旅費の都合は出來まいかといふのが母の用向であつた。

「え、旅費位何うでもして上げますから、すぐ行つて御上なさい」

宿屋に寐てゐる苦しい人と、汽車で立つて行く寒い人とを心から氣の毒に思つた健三は、自分

のまだ見た事もない遠くの空の雀びしき空想像の眼に浮べた。

「何しろ電報が來た丈で、詳しい事は丸で分りませんのですから」

「ぢや猶御心配でせう。成るべく早く御立ちになる方が好いでせう」

幸ひにして父の病氣は輕かつた。然し彼の手を着けかけたといふ鑛山事業はそれぎり立消になつてしまつた。

「まだ何にも見付からないのかね、口は」

「有にはあるやうですけども旨く纏まらないんですつて」

細君は父がある大きな都會の市長の候補者になつた話をして聞かせた。其運動費は財力のある彼の舊友の一人が負擔して呉れてゐるやうであつた。然し市の有志家が何名か打ち揃つて上京した時に、有名な政治家のある伯爵に會つて、父の適不適を問ひ訊いたら、其伯爵が何うも不向だらうと答へたので、話はそれぎりで已になつたのださうである。

「何うも困るね」

「今に何とかなるでせう」

細君は健三よりも自分の父の方を遙に餘計信用してゐた。健三も例の怪力を知らないではなかつた。

「たゞ氣の毒だからさう云ふ丈さ」
彼の言葉に嘘はなかつた。

七十六

けれども其次に細君の父が健三を訪問した時には、二人の關係がもう變つてゐた。自ら進んで母に旅費を用立つた女婚は、一步退かなければならなかつた。彼は比較的遠い距離に立つて細君の父を眺めた。然し彼の眼に漂よふ色は冷淡でも無頓着でもなかつた。寧ろ黒い瞳から閃めかうとする反感の稲妻であつた。力めて其稲妻を隠さうとした彼は、己を得ず此鋭く光るものに冷淡と無頓着の假装を着せた。

父は悲境にゐた。まのあたり見る父は鄭寧であつた。此二つのものが健三の自然に壓迫を加へた。積極的に突ツ掛る事の出来ない彼は控へなければならなかつた。單なる無愛想の程度で我慢すべく餘儀なくされた彼には、相手の苦しい現状と感慙な態度とが、却てわが天眞の流露を妨げる邪魔物になつた。彼から云へば、父は斯ういふ意味に於て彼を苦しめに來たと同じ事であつた。父から云へば、普通の人としてさへ不都合に近い愚劣な應對振を、自分の女婚に見出すのは、堪へがたい馬鹿らしさに違なかつた。前後と關係のない此場丈の光景を眺める傍觀者の眼にも健三は矢張馬鹿であつた。それを承知してゐる細君にすら、夫は決して賢い男ではなかつた。

「私も今度といふ今度は困りました」

最初に斯う云つた父は健三からはかゝしい返事すら得なかつた。

父はやがて財界で有名な或人の名を擧げた。其人は銀行家でもあり、又實業家でもあつた。

「實は此間ある人の周旋で會つて見ましたが、何うか旨く出來さうですよ。三井と三菱を除けば日本ではまあ彼處位なもんですから、使用人になつたからと云つて、別に私の體面に關する事もありませんし、それに仕事をする區域も廣い様ですから、面白く働けるだらうと思ふんです」
此財力家によつて細君の父に豫約された位地といふのは、關西にある或私立の鐵道會社の社長であつた。會社の株の大部分を一人で所有してゐる其人は、自分の意志の儘に、其處の社長を選

ぶ特権を有してゐたのである。然し何十株か何百株かの持主として、豫め資格を作つて置かなければならない父は、何うして金の工面をするだらう。事狀に通じない健三には此疑問さへ解けなかつた。

「一時必要な株數丈を私の名儀に書換へて貰ふんです」

健三は父の言葉に疑ひを挟む程、彼の才能を見縊つてゐなかつた。彼と彼の家族とを目下の苦境から解脱させるといふ意味に於ても、其成功を希望しない譯に行かなかつた。然し依然として元の立場に立つてゐる事も改める譯に行かなかつた。彼の挨拶は形式的であつた。さうして幾分か彼の心の柔かい部分をわざと堅苦しくした。老巧な父は丸で其處に注意を拂はないやうに見えた。

「然し困る事に、是は今が今といふ譯に行かないのです。時機があるものですからな」

彼は懐から又一枚の辭令見たやうなものを出して健三に見せた。それには或保險會社が彼に顧問を囑託するといふ文句と、其報酬として月々彼に百圓を贈與するといふ條件が書いてあつた。

「今御話した一方の方が出来たら是は已るか、又は出来ても續けてやるか、其邊はまだ分らな

いんですが、兎に角百圓でも當座の凌ぎにはなりますから」

昔し彼が政府の内意で或官職を抛つた時、當路の人は山陰道筋のある地方の知事なら轉任させても好いといふ條件を付けた事があつた。然し彼は斷然それを斥けた。彼が今大して隆盛でもない保險會社から百圓の金を貰つて、別に厭な顔をしなないのも、矢張境遇の變化が彼の性格に及ぼす影響に相違なかつた。

斯うした懸け隔てのない父の態度は、動ともすると健三を自分の立場から前へ押し出さうとした。其傾向を意識するや否や彼は又後戻りをしなければならなかつた。彼の自然は不自然らしく見える彼の態度を倫理的に認可したのである。

七十七

細君の父は事務家であつた。動ともすると仕事本位の立場からばかり人を評價したがつた。乃木將軍が一時臺灣總督になつて間もなくそれを已めた時、彼は健三に向つて斯んな事を云つた。「個人としての乃木さんは義に堅く情に篤く實に立派なものです。然し總督としての乃木さん

が果して適任であるか何うかといふ問題になると、議論の餘地がまだ大分あるやうに思ひます。個人の徳は自分に親しく接觸する左右のものには能く及ぶかも知れませんが、遠く離れた被治者に利益を與へやうとするには不十分です。其處へ行くと矢つ張手腕ですね。手腕がなくなつちや、何んな善人でもたゞ坐つてゐるより外に仕方がありませんからね」

彼は在職中の關係から或會の事務一切を管理してゐた。侯爵を會頭に頂く其會は、彼の力で設立の主意を綺麗に事業の上で完成した後、彼の手元に二萬圓程の剩餘金を委ねた。官途に縁がなくなつてから、不如意に不如意の續いた彼は、つい其委託金に手を付けた。さうして何時の間にか全部を消費してしまつた。然し彼は自家の信用を維持するために誰にもそれを打ち明けなかつた。従つて彼は此預金から當然生まれて来る百圓近くの利子を毎月調達して、體面を繕はなければならなかつた。自家の經濟よりも却つて此方を苦に病んでゐた彼が、公生涯の持續に絶対に必要な其百圓を、月々保險會社から貰ふやうになつたのは、當時の彼の心中に立入つて考へて見ると、全く嬉しいに違なかつた。

餘程後になつて始めて此話を細君から聽いた健三は、彼女の父に對して新たな同情を感じた丈で、

不徳義漢として彼を惡む氣は更に起らなかつた。さういふ男の娘と夫婦になつてゐるのが恥づかしいなどとは更に思はなかつた。然し細君に對しての健三は、此點に關して殆ど無言であつた。細君は時々彼に向つて云つた。――

「妾、どんな夫でも構ひませんわ、たゞ自分に好くして呉れさへすれば」

「泥棒でも構はないのかい」

「えゝえゝ、泥棒だらうが、詐欺師だらうが何でも好いわ。たゞ女房を大事にして呉れれば、それで澤山なのよ。いくら偉い男だつて、立派な人間だつて、宅で不親切ぢや妾にや何にもならないんですもの」

實際細君は此の言葉通りの女であつた。健三も其意見には賛成であつた。けれども彼の推察は月の暈の様に細君の言外迄滲み出した。學問ばかりに屈託してゐる自分を、彼女が斯ういふ言葉で餘所ながら非難するのだと云ふ臭が何處やらでした。然しそれよりも遙に強く、夫の心を知らない彼女が斯んな態度で暗に自分の父を辯護するのではないかといふ感じが健三の胸を打た。

「已はそんな事で人と離れる人間ぢやない」

自分を細君に説明しやうと力めなかつた彼も、獨り辯解の言葉を繰り返す事は忘れなかつた。然し細君の父と彼との交情に、自然の溝渠が出来たのは、やはり父の重きを置き過ぎてゐる手腕の結果としか彼には思へなかつた。

健三は正月に父の所へ禮に行かなかつた。恭賀新年といふ端書文を出した。父はそれを寛假さなかつた。表向それを咎める事もしなかつた。彼は十二三になる末の子に、同じく恭賀新年といふ曲りくねつた字を書かして、其子の名前で健三に賀状の返しをした。斯ういふ手腕で彼に返報する事を巨細に心得てゐた彼は、何故健三が細君の父たる彼に、賀正を口づから述べなかつたかの原因に就いては全く無反省であつた。

一事は萬事に通じた。利が利を生み、子に子が出来た。二人は次第に遠ざかつた。已を得ないで犯す罪と、遣らんでも濟むのにわざと遂行する過失との間に、大變な區別を立てゝゐる健三は、性質の宜しくない此餘裕を非常に惡み出した。

七十八

「興し易い男だ」

實際に於て興し易い或物を多量に有つてゐると自覺しながらも、健三は他から斯う思はれるのが癢に障つた。

彼の神経は此肝癢を乗り越えた人に向つて鋭い懐しみを感した。彼は群衆のうちにあつて直さういふ人を物色する事の出来る眼を有つてゐた。けれども彼自身は何うしても其域に達せられなかつた。だから猶さういふ人が眼に着いた。又さういふ人を餘計尊敬したくなつた。

同時に彼は自分を罵つた。然し自分を罵らせるやうにする相手をば更に烈しく罵つた。

斯くして細君の父と彼との間には自然の造つた溝渠が次第に出来上つた。彼に對する細君の態度も暗にそれを手傳つたには相違なかつた。

二人の間柄が擦れ／＼になると、細君の心は段々生家の方へ傾いて行つた。生家でも同情の結果、冥々の裡に細君の肩を持たなければならなくなつた。然し細君の肩を持つといふ事は、或場合に於て、健三を敵とするといふ意味に外ならなかつた。二人は益離れる丈であつた。

幸ひにして自然は緩和劑としての歇斯的里を細君に與へた。發作は都合好く二人の關係が緊張

した間際に起つた。健三は時々便所へ通ふ廊下に俯伏になつて倒れてゐる細君を抱き起して床の上迄連れて來た。眞夜中に雨戸を一枚明けた縁側の端に蹲踞つてゐる彼女を、後から兩手で支へて、寢室へ戻つて來た經驗もあつた。

そんな時に限つて、彼女の意識は何時でも朦朧として夢よりも分別がなかつた。瞳孔が大きく開いてゐた。外界はたゞ幻影のやうに映るらしかつた。

枕邊に坐つて彼女の顔を見詰めてゐる健三の眼には何時でも不安が閃めいた。時としては不憫の念が凡てに打ち勝つた。彼は能く氣の毒な細君の亂れかゝつた髪に櫛を入れて遣つた。汗ばんだ額を濡れ手拭で拭いて遣つた。たまには氣を確にするために、顔へ霧を吹き掛けたり、口移しに水を飲ませたりした。

發作の今よりも劇しかつた昔の様も健三の記憶を刺戟した。

或時の彼は毎夜細い紐で自分の帶と細君の帶とを繋いで寐た。紐の長さを四尺程にして、寐返りが十分出来るやうに工夫された此用意は、細君の抗議なしに幾晩も繰返された。

或時の彼は細君の鳩尾へ茶碗の糸底を宛がつて、力任せに押し付けた。それでも踏ん返り返ら

うとする彼女の魔力を此一點で喰ひ留めなければならぬ彼は冷たい油汗を流した。

或時の彼は不思議な言葉を彼女の口から聞かされた。

「御天道さまが來ました。五色の雲へ乗つて來ました。大變よ、貴夫」

「妾の赤ん坊は死んぢまつた。妾の死んだ赤ん坊が來たから行かなくつちやならない。そら其處にゐるぢやありませんか。桔槔の中に。妾一寸行つて見て來るから放して下さい」

流産してから間もない彼女は、抱き竦めにかゝる健三の手を振り拂つて、斯う云ひながら起き上がらうとしたのである。……

細君の發作は健三に取つての大いなる不安であつた。然し大抵の場合には其不安の上に、より大いなる慈愛の雲が飄颻してゐた。彼は心配よりも可哀想になつた。弱い憐れなものゝ前に頭を下げて、出來得る限り機嫌を取つた。細君も嬉しさうな顔をした。

だから發作に故意だらうといふ疑ひの掛からない以上、また餘りに肝癢が強過ぎて、何うでも勝手にしろといふ氣にならない以上、最後に其度數が自然の同情を妨げて、何でさう己を苦しめるのかといふ不平が高まらない以上、細君の病氣は二人の仲を和らげる方法として、健三に必要

であつた。

不幸にして細君の父と健三との間には斯ういふ重寶な緩和劑が存在してゐなかつた。従つて細君が本で出来た兩者の疎隔は、たとひ夫婦の關係が常に復した後でも、一寸埋める譯に行かなかつた。それは不思議な現象であつた。けれども事實に相違なかつた。

七十九

不合理な事の嫌ひな健三は心の中でそれを苦に病んだ。けれども別に何うする了簡も出さなかつた。彼の性質はむきでもあり一圖でもあつたと共に頗る消極的な傾向を帯びてゐた。

「己にそんな義務はない」

自分に訊いて、自分に答を得た彼は、其答を根本的なものと信じた。彼は何時までも不愉快の中で起臥する決心をした。成行が自然に解決を付けて呉れるだらうとさへ豫期しなかつた。

不幸にして細君も亦此點に於て何處迄も消極的な態度を離れなかつた。彼女は何か事件があれば動く女であつた。他から頼まれて男より邁進する場合もあつた。然しそれは眼前に手で觸れら

れる丈の明瞭な或物を捉まへた時に限つてゐた。所が彼女の見た夫婦關係には、そんな物が何處にも存在してゐなかつた。自分の父と健三の間にも是といふ程の破綻は認められなかつた。大きな具象的な變化でなければ事件と認めない彼女は其他を閑却した。自分と、自分の父と、夫との間に起る精神状態の動搖は手の着けやうのないものだと思つてゐた。

「だつて何にもないぢやありませんか」

裏面に其動搖を意識しつゝ彼女は斯う答へなければならなかつた。彼女に最も正當と思はれた此答が、時として虚偽の響をもつて健三の耳を打つ事があつても、彼女は決して動かなかつた。仕舞に何うなつても構はないといふ投げ遣りの氣分が、單に消極的な彼女を猶の事消極的に練り堅めて行つた。

斯くして夫婦の態度は悪い所で一致した。相互の不調和を永續するためにと評されても仕方のない此一致は、根強い彼等の性格から割り出されてゐた。偶然といふよりも寧ろ必然の結果であつた。互に顔を見合せて彼等は、相手の人相で自分の運命を判断した。

細君の父が健三の手で調達された金を受取つて歸つてから、それを特別の問題としなかつた

夫婦は、却て餘事を話し合つた。

「産婆は何時頃生ると云ふのかい」

「何時つて判然云ひもしませんが、もう直ですわ」

「用意は出来てるのかい」

「え、奥の戸棚の中に入つてゐます」

健三には何が這入つてゐるのか分らなかつた。細君は苦しさに大きな溜息を吐いた。

「何しろ斯う重苦しくつちや堪らない。早く生れてくれなくつちや」

「今度は死ぬかも知れないつて云つてたぢやないか」

「え、死んでも何でも構はないから、早く生んぢまひたいわ」

「どうも御氣の毒さまだな」

「好いわ、死ぬば貴夫の所爲だから」

健三は遠い田舎で細君が長女を生んだ時の光景を憶ひ出した。不安さうに苦い顔をしてゐた彼が、産婆から少し手を貸して呉れと云はれて産室へ入つた時、彼女は骨に應へるやうな恐ろしい

力でききなり健三の腕に獅噛み付いた。さうして拷問でもされる人のやうに唸つた。彼は自分の細君が身體の上に受けつゝある苦痛を精神的に感じた。自分が罪人ではないかといふ氣さへした。

「産をするのも苦しいだらうが、それを見てゐるのも辛いものだぜ」

「ぢや何處かへ遊びにでも入らつしやいな」

「一人で生めるかい」

細君は何とも答へなかつた。夫が外國へ行つてゐる留守に、次の娘を生んだ時の事などは丸で口にしなかつた。健三も訊て見やうとは思はなかつた。生れ付き心配性な彼は、細君の唸聲を餘所にして、ぶら／＼外を歩いてゐられるやうな男ではなかつた。

産婆が次に顔を出した時、彼は念を押した。

「一週間以内かね」

「いえもう少し後でせう」

健三も細君も其氣でゐた。

日取が狂つて豫期より早く産氣づいた細君は、苦しうな聲を出して、側に寐てゐる夫の夢を驚かした。

「先刻から急に御腹が痛み出して……」

「もう出さうなのかい」

健三には何の位な程度で細君の腹が痛んでゐるのか分らなかつた。彼は寒い夜の中に夜具から顔丈出して、細君の様子をそつと眺めた。

「少し撫つて遣らうか」

起き上る事の臆怯な彼は出来る丈口先で間に合せやうとした。彼は産に就いての経験をたゞ一度しか有つてゐなかつた。其経験も大方は忘れてゐた。けれども長女の生れる時には、斯ういふ痛みが、潮の満干のやうに、何度も來たり去つたりしたやうに思へた。

「さう急に生れるもんぢやないだらうな、子供つてものは。一仕切痛んではまた一仕切治まる

んだらう」

「何だか知らないけれども段々痛くなる丈ですわ」

細君の態度は明かに彼女の言葉を證據立てた。凝と蒲團の上に落付いてゐられない彼女は、枕を外して右を向いたり左へ動いたりした。男の健三には手の着けやうがなかつた。

「産婆を呼ばうか」

「え、早く」

職業柄産婆の宅には電話が掛つてゐたけれども、彼の家にそんな氣の利いた設備のあらう筈はなかつた。至急を要する場合が起るたびに、彼は何時でも掛りつけの近所の醫者の所へ駆けつけるのを例にしてゐた。

初冬の暗い夜はまだ明け離れるのに大分間があつた。彼は其人と其人の門を敲く下女の迷惑を察した。然し夜明迄安閑と待つ勇氣がなかつた。寢室の襖を開けて、次の間から茶の間を通つて、下女部屋の入口迄來た彼は、すぐ召使の一人を急ぎ立て、暗い夜の中へ追ひ遣つた。

彼が細君の枕元へ歸つて來た時、彼女の痛みは益劇しくなつた。彼の神経は一分毎に門前で

停る車の響を待ち受けなければならぬ程に緊張して来た。産婆は容易に來なかつた。細君の唸る聲が絶間なく静かな夜の室を不安に攪き亂した。五分経つか経たないうちに、彼女は「もう生れます」と夫に宣告した。さうして今迄我慢に我慢を重ねて休へて來たやうな叫び聲を一度に揚げると共に胎兒を分娩した。

「確かしろ」

すぐ立つて蒲團の裾の方に廻つた健三は、何うして好いか分らなかつた。其時例の洋燈は細長い火蓋の中で、死のやうに静かな光を薄暗く室内に投げた。健三の眼を落してゐる邊は、夜具の縞柄さへ判明しないぼんやりした陰で一面に裏まれてゐた。

彼は狼狽した。けれども洋燈を移して其處を照すのは、男子の見るべからざるものを強ひて見るやうな心持がして氣が引けた。彼は已を得ず暗中に摸索した。彼の右手は忽ち一種異様の觸覺をもつて、今迄經驗した事のない或物に觸れた。其或物は寒天のやうにぷり／＼してゐた。さうして輪廓からいつても恰好の判然しない何かの塊に過ぎなかつた。彼は氣味の悪い感じを彼の全身に傳へる此塊を軽く指頭で撫で、見た。塊りは動きもしなければ泣きもしなかつた。たゞ撫

でるたんびにぷり／＼した寒天のやうなものが剥げ落ちるやうに思へた。若し強く抑へたり持つたりすれば、全體が屹度崩れて仕舞ふに違ないと彼は考へた。彼は恐ろしくなつて急に手を引込めた。

「然し此儘にして放つて置いたら、風邪を引くだらう、寒さで凍えてしまふだらう」

死んでゐるか生きてゐるかさへ辨別のつかない彼にも斯ういふ懸念が湧いた。彼は忽ち出産の用意が戸棚の中に入れてあるといつた細君の言葉を思ひ出した。さうしてすぐ自分の後部にある唐紙を開けた。彼は其處から多量の綿を引き摺り出した。脱脂綿といふ名さへ知らなかつた彼は、それを無暗に干切つて、柔かい塊の上に載せた。

八十一

其内待に待た産婆が來たので、健三は漸く安心して自分の室へ引取た。

夜は間もなく明けた。赤子の泣く聲が家の中の寒い空氣を顫はせた。

「御安産で御目出たう御座います」

「男かね女かね」

「女の御子さんで」

産婆は少し氣の毒さうに中途で句を切つた。

「又女か」

健三にも多少失望の色が見えた。一番目が女、二番目が女、今度生れたのも亦女、都合三人の娘の父になつた彼は、さう同じものばかり生んで何うする氣だらうと、心の中で暗に細君を非難した。然しそれを生ませた自分の責任には思ひ到らなかつた。

田舎で生れた長女は肌理の濃やかな美しい子であつた。健三はよく其子を乳母車に乗せて町の中を後から押して歩いた。時によると、天使のやうに安らかな眠りに落ちた顔を眺めながら宅へ歸つて來た。然し當にならないのは想像の未來であつた。健三が外國から歸つた時、人に伴はれて彼を新橋に迎へた此娘は、久し振りに父の顔を見て、もつと好い御父さまかと思つたと傍のものに語つた如く、彼女自身の容貌もしばらく見ないうちに悪い方に變化してゐた。彼女の顔は段々丈が詰つて來た。輪廓に角が立つた。健三は此娘の容貌の中にいつか成長しつゝある自分の

相好の悪い所を明かに認めなければならなかつた。

次女は年が年中腫物だらけの頭をしてゐた。風通しが悪いからだらうといふのが本で、とうとう髪の毛をぢよぎ／＼に剪つてしまつた。額の短い眼の大きな其子は、海坊主の化物のやうな風をして、其處いらをうろ／＼してゐた。

三番目の子丈が器量好く育たうとは親の慾目にも思へなかつた。

「あゝ云ふものが續々生れて來て、必竟何うするんだらう」

彼は親らしくもない感想を起した。その中には、子供ばかりではない、斯ういふ自分や自分の細君なども、必竟何うするんだらうといふ意味も臆氣に交つてゐた。

彼は外へ出る前に一寸寢室へ顔を出した。細君は洗ひ立てのシーツの上に穩かに寐てゐた。子供も小さい付屬物のやうに、厚い綿の入つた新調の夜具蒲團に包まれたまゝ、傍に置いてあつた。其子供は赤い顔をしてゐた。昨夜暗闇で彼の手に觸れた寒天のやうな肉塊とは全く感じの違ふものであつた。

一切も綺麗に始末されてゐた。其處いらには汚れ物の影さへ見えなかつた。夜來の記憶は跡方

もない夢らしく見えた。彼は産婆の方を向いた。

「蒲團は換へて遣つたのかい」

「え、蒲團も敷布も換へて上げました」

「よく斯う早く片付けられるもんだね」

産婆は笑ふ丈であつた。若い時から獨身で通して來た此女の聲や態度は何處となく男らしかつた。

「貴夫が無暗に脱脂綿を使って御仕舞になつたものだから、足りなくつて大變困りましたよ」

「左右だらう。随分驚いたからね」

斯う答へながら健三は大して氣の毒な思ひもしなかつた。それよりも多量に血を失つて蒼い顔をしてゐる細君の方が懸念の種になつた。

「何うだ」

細君は微かに眼を開けて、枕の上で軽く肯づいた。健三は其儘外へ出た。例刻に歸つた時、彼は洋服のまゝで又細君の枕元に坐つた。

「何うだ」

然し細君はもう肯づかなかつた。

「何だか變な様です」

彼女の顔は今朝見た折と違つて熱で火照つてゐた。

「心持が悪いのかい」

「え、」

「産婆を呼びに遣らうか」

「もう來るでせう」

産婆は來る筈になつてゐた。

八十二

やがて細君の腋の下に驗溫器が宛がはれた。
「熱が少し出ましたね」

産婆は斯う云つて度盛の柱の中の上つた水銀を振り落した。彼女は比較的言葉寡なであつた。用心のため産科の醫者を呼んで診て貰つたら何うだといふ相談さへせず歸つてしまつた。

「大丈夫なのかな」

「何うですか」

健三は全くの無知識であつた。熱さへ出ればすぐ産褥熱ぢやなからうかといふ危惧の念を起した。母から掛り付けて來た産婆に信頼してゐる細君の方が却つて平氣であつた。

「何うですかつて、お前の身體ぢやないか」

細君は何とも答へなかつた。健三から見ると、死んだつて構はないといふ表情が其顔に出てゐるやうに思へた。

「人が斯んなに心配して遣るのに」

此感じを翌る日迄持ち續けた彼は、何時もの通り朝早く出て行つた。さうして午後歸つて來て、細君の熱がもう退めてゐる事に氣が附いた。

「矢つ張何でもなかつたのかな」

「えゝ。だけど何時又出て來るか分りませんわ」

「産をすると、そんなに熱が出たり引つ込んだりするものかね」

健三は眞面目であつた。細君は淋しい頬に微笑を洩らした。

熱は幸ひにしてそれぎり出なかつた。産後の経過は先づ順當に行つた。健三は既定の三週間を床の上に過すべく命ぜられた細君の枕元へ來て、時々話をしながら坐つた。

「今度は死ぬ死ぬつて云ひながら、平氣で生きてゐるぢやないか」

「死んだ方が好ければ何時でも死にます」

「それは御隨意だ」

夫の言葉を戲談半分に聽いてゐられるやうになつた細君は、自分の生命に對して鈍いながらも一種の危険を感じた其當時を顧みなければならなかつた。

「實際今度は死ぬと思つたんですもの」

「何ういふ譯で」

「譯はないわ、たゞ思ふのに」

死ぬと思つたのに却つて普通の人より軽い産をして、豫想と事實が丁度裏表になつた事さへ
細君は氣に留めてゐなかつた。

「御前は呑氣だね」

「貴夫こそ呑氣よ」

細君は嬉しさうに自分の傍に寝てゐる赤ん坊の顔を見た。さうして指の先で小さい頬片を突つ
いて、あやし始めた。其赤ん坊はまだ人間の體裁を具へた眼鼻を有つてゐるとは云へない程變な
顔をしてゐた。

「産が軽い丈あつて、少し小さ過ぎる様だね」

「今に大きくなりますよ」

健三は此小さい肉の塊りが今の細君のやうに大きくなる未來を想像した。それは遠い先にあつ
た。けれども中途で命の綱が切れない限り何時か來るに相違なかつた。

「人間の運命は中々片付かないもんだな」

細君には夫の言葉があまりに突然過ぎた。さうして其意味が解らなかつた。

「何ですつて」

健三は彼女の前に同じ文句を繰返すべく餘儀なくされた。

「それが何うしたの」

「何うもしないけれども、左右だから左右だといふのさ」

「話らないわ。他に解らない事さへ云ひや、好いかと思つて」

細君は夫を捨て、又自分の傍に赤ん坊を引き寄せた。健三は厭な顔もせず書齋へ入つた。

彼の心のうちには死なない細君と、丈夫な赤ん坊の外に、免職にならうとしてならずにいる兄
の事があつた。喘息で斃れやうとして未だ斃れずにいる姉の事があつた。新しい位地が手に入
るやうでまだ手に入らない細君の父の事があつた。其他島田の事もお常の事もあつた。さうして
自分と是等の人々との關係が皆なまだ片付かずにゐるといふ事もあつた。

八十三

子供は一番氣樂であつた。生きて人形でも買つて貰つたやうに喜んで、閑さへあると、新しい

妹の傍に寄りたがつた。其妹の瞬き一つさへ驚嘆の種になる彼等には、噓でも欠でも何でも彼でも不可思議な現象と見えた。

「今に何んなになるだらう」

當面に忙殺される彼等の胸には曾て斯うした問題が浮かばなかつた。自分達自身の今に何んなになるかをすら了解し得ない子供等は、無論今に何うするだらう杯と考へる筈がなかつた。

此意味で見た彼等は細君よりも尙遠く健三を離れてゐた。外から歸つた彼は、時々洋服も脱がずに、敷居の上に立ちながら、ぼんやり是等の一團を眺めた。

「又塊つてゐるな」

彼はすぐ踵を回らして部屋の外へ出る事があつた。

時によると彼は服も改めず、すぐ其處へ胡坐をかいた。

「斯う始終湯婆ばかり入れてゐちや子供の健康に悪い。出してしまへ。第一幾何入れるんだ」
彼は何にも解らない癖に好い加減な小言を云つて却て細君から笑はれたりした。

日が重なつても彼は赤ん坊を抱いて見る氣にならなかつた。それでゐて一つ室に塊つてゐる子

供と細君とを見ると、時々別な心持を起した。

「女は子供を専領してしまふものだね」

細君は驚いた顔をして夫を見返した。其處には自分が今迄無自覺で實行して來た事を、夫の言葉で突然悟らされたやうな趣もあつた。

「何で藪から棒にそんな事を仰やるの」

「だつて左右ぢやないか。女はそれで氣に入らない亭主に敵討をする積なんだらう」

「馬鹿を仰やい。子供が私の傍へばかり寄り付くのは、貴夫が構ひ付けて御遣りなさらないからです」

「己を構ひ付けなくさせたものは、取も直さず御前だらう」

「何うでも勝手になさい。何ぞといふと僻みばかり云つて。どうせ口の達者な貴夫には敵ひませんから」

健三は寧ろ眞面目であつた。僻みとも口巧者とも思はなかつた。

「女は策略が好きだから不可い」

細君は床の上で寐返りをして彼方を向いた。さうして涙をぼたくくと枕の上に落した。

「そんなにも私を虐めなくつても……」

細君の様子を見てゐた子供はすぐ泣き出しさうにした。健三の胸は重苦しくなつた。彼は征服されると知りながらも、まだ産褥を離れ得ない彼女の前に慰藉の言葉を並べなければならなかつた。然し彼の理解力は依然として此同情とは別物であつた。細君の涙を拭いてやつた彼は、其涙で自分の考へを訂正する事が出来なかつた。

次に顔を合せた時、細君は突然夫の弱點を刺した。

「貴夫何故其子を抱いて御遣りにならないの」

「何だか抱くと險呑だからさ。頸でも折ると大變だからね」

「嘘を仰しやい。貴夫には女房や子供に對する情合が缺てゐるんですよ」

「だつて御覽な、ぐたくして抱き慣れない男に手なんか出せやしないぢやないか」

實際赤ん坊はぐたくしてゐた。骨などは何處にあるか丸で分らなかつた。それでも細君は承知しなかつた。彼女は昔一番目の娘に水疱瘡の出来た時、健三の態度が俄に一變した實例を證據

に擧げた。

「それ迄毎日抱いて遣つて居たのに、それから急に抱かなくなつたぢやありませんか」

健三は事實を打消す氣もなかつた。同時に自分の考へを改めやうともしなかつた。

「何と云つたつて女には技巧があるんだから仕方がない」

彼は深く斯う信じてゐた。恰も自分自身は凡ての技巧から解放された自由の人であるかのやうに。

八十四

退屈な細君は貸本屋から借りた小説を能く床の上で讀んだ。時々枕元に置いてある厚紙の汚らしい其表紙が健三の注意を惹く時、彼は細君に向つて訊いた。

「斯んなものが面白いのかい」

細君は自分の文學趣味の低い事を嘲けられるやうな氣がした。

「可いぢやありませんか、貴夫に面白くなくなつたつて、私にさへ面白けりや」

色々な方面に於て自分と夫の隔離を意識してゐた彼女は、すぐ斯んな口が利きたくなつた。健三の所へ嫁ぐ前の彼女は、自分の父と自分の弟と、それから官邸に出入する二三の男を知つてゐるぎりであつた。さうして其人々はみんな健三とは異つた意味で生きて行くものばかりであつた。男性に對する觀念をその數人から抽象して健三の所へ持つて來た彼女は、全く豫期と反對した一個の男を、彼女の夫に於て見出した。彼女は其何方かゞ正しくなければならぬと思つた。無論彼女の眼には自分の父の方が正しい男の代表者の如くに見えた。彼女の考へは單純であつた。今に此夫が世間から教育されて、自分の父のやうに、型が變つて行くに違ひないといふ確信を有つてゐた。

案に相違して健三は頑強であつた。同時に細君の膠着力も固かつた。二人は二人同士で輕蔑し合つた。自分の父を何かにつけて標準に置きたがる細君は、動ともすると心の中で夫に反抗した。健三は又自分を認めない細君を忌々しく感じた。一刻な彼は遠慮なく彼女を眼下に見下す態度を公けにして憚らなかつた。

「ぢや貴夫が教へて下されば好いのに。そんなに他を馬鹿にばかりなさらないで」

「御前の方に教へて貰はうといふ氣がないからさ。自分はもう是で一人前だといふ腹があつちや、己にや何うする事も出来ないよ」

誰が盲従するものかといふ氣が細君の胸にあると同時に、到底啓發しやうがないではないかと、いふ辯解が夫の心に潜んでゐた。二人の間に繰返される斯うした言葉争ひは古いものであつた。然し古いだけで埒は一向開かなかつた。

健三はもう飽きたといふ風をして、手摺のした貸本を投げ出した。

「讀むなと云ふんぢやない。それはお前の隨意だ。然し餘まり眼を使はないやうにしたら好いだらう」

細君は裁縫が一番好きであつた。夜眼が冴えて寝られない時などは、一時でも二時でも構はずに、細い針の目を洋燈の下に運ばせてゐた。長女か次女が生れた時、若い元氣に任せて、相當の時期が経過しないうちに、縫物を取上げたのが本で、大變視力を悪くした経験もあつた。

「えゝ、針を持つのは毒ですけれども、本位構はないでせう。それも始終讀んでゐるんぢやありませんから」

「然し疲れる迄読み續けない方が好からう。でないと後で困る」
「なに大丈夫です」

まだ三十に足りない細君には過勞の意味が能く解らなかつた。彼女は笑つて取り合はなかつた。
「お前が困らなくつても己が困る」

健三はわざと手前勝手らしい事を云つた。自分の注意を無にする細君を見ると、健三はよく斯んな言葉遣ひをしたがつた。それが又夫の悪い癖の一つとして細君には數へられてゐた。

同時に彼のノートは益細かくなつて行つた。

最初蠅の頭位であつた字が次第に蠅の頭程に縮まつて來た。何故そんな小さな文字を書かなかければならないのかとさへ考へて見なかつた彼は、殆ど無意味に洋筆を走らせて已まなかつた。日の光の弱つた夕暮の窓の下、暗い洋燈から出る薄い燈火の影、彼は暇さへあれば彼の視力を濫費して顧みなかつた。細君に向つてした注意をかつて自分に拂はなかつた彼は、それを矛盾とも何とも思はなかつた。細君もそれで平氣らしく見えた。

八十五

細君の床が上げられた時、冬はもう荒れ果てた彼等の庭に霜柱の錐を立てやうとしてゐた。

「大變荒れた事、今年は例より寒いやうね」

「血が少くなつた所爲で、さう思ふんだらう」

「左右でせうかしら」

細君は始めて氣が付いたやうに、兩手を火鉢の上に翳して、自分の爪の色を見た。

「鏡を見たら顔の色でも分りさうなものだのにね」

「え、そりや分つてますわ」

彼女は再び火の上に差し延べた手を返して蒼白い頬を二三度撫でた。

「然し寒い事も寒いんでせう、今年は」

健三には自分の説明を聽かない細君が可笑しく見えた。

「そりや冬だから寒いに極つてゐるさ」

細君を笑ふ健三はまた人よりも一倍寒がる男であつた。ことに近頃の冬は彼の身體に厳しく中つた。彼は已を得ず書齋に炬燵を入れて、兩膝から腰のあたりに浸み込む冷を防いだ、神經衰弱の結果斯う感ずるのかも知れないとさへ思はなかつた彼は、自分に對する注意の足りない點に於て、細君と異なる所がなかつた。

毎朝夫を送り出してから髪に櫛を入れる細君の手には、長い髪の毛が何本となく残つた。彼女は梳くたびに櫛の齒に絡まる其抜毛を残り惜氣に眺めた。それが彼女には失はれた血潮よりも却て大切らしく見えた。

「新しく生きたものを拵へ上げた自分は、其償ひとして衰へて行かなければならない」

彼女の胸には微かに斯ういふ感じが湧いた。然し彼女は其微かな感じを言葉に纏める程の頭を有てゐなかつた。同時に其感じには手柄をしたといふ誇りと、罰を受けたといふ恨みと、が交つてゐた。いづれにしても、新しく生れた子が可愛くなるばかりであつた。

彼女はぐたく／＼して手應へのない赤ん坊を手際よく抱き上げて、其丸い頬へ自分の唇を持つて行つた。すると自分から出たものは何うしても自分の物だといふ氣が理窟なしに起つた。

彼女は自分の傍に其子を置いて、また裁もの板の前に坐つた。さうして時々針の手を已めては、暖かさうに寝てゐるその顔を、心配さうに上から覗き込んだ。

「そりや誰の着物だい」

「矢つ張此子のです」

「そんなに幾何も要るのかい」

「えゝ」

細君は黙つて手を運ばしてゐた。

健三は漸と氣が付いた様に、細君の膝の上に置かれた大きな模様のある切地を眺めた。

「それは姉から祝つて呉れたんだらう」

「左右です」

「下らない話だな。金もないのに止せば好いのに」

健三から貰つた小遣の中を割いて、斯ういふ贈り物をしなければ氣の濟まない姉の心持が、彼には理解出来なかつた。

「つまり己の金で己が買ったと同じ事になるんだからな」

「でも貴夫に對する義理だと思つてゐらつしやるんだから仕方がありませんわ」

姉は世間でいふ義理を克明に守り過ぎる女であつた。他から物を貰へば屹度それ以上のものを贈り返さうとして苦しがつた。

「何うも困るね、さう義理々々つて、何が義理だか薩張解りやしない。そんな形式的な事をするより、自分の小遣を比田に借りられないやうな用心でもする方が餘程増しだ」

斯んな事に掛けると存外無神経な細君は、強ひて姉を辯護しやうともしなかつた。

「今に又何か御禮をしますから夫で好いでせう」

他を訪問する時に殆ど土産ものを持參した例のない健三は、それでもまだ不審さうに細君の膝の上にあるめりんすを見詰めてゐた。

八十六

「だから元は御姉さんの所へ皆なが色んな物を持つて來たんですつて」

細君は健三の顔を見て突然斯んな事を云ひ出した。

「十のものには十五の返しをなさる御姉さんの氣性を知つてるもんだから、皆な其御禮を目的に何か呉れるんださうですよ」

「十のものに十五の返しをするつたつて、高が五十錢が七十五錢になる丈ぢやないか」

「夫で澤山なんでせう。さういふ人達は」

他から見ると酔興としか思はれない程細かなノートばかり拵へてゐる健三には、世の中にそんな人間が生きてゐやうとさへ思へなかつた。

「随分厄介な交際だね。だいち馬鹿々々しいぢやないか」

「傍から見れば馬鹿々々しいやうですけれども、其中に入ると、矢つ張仕方がないんでせう」

健三は此間餘所から臨時に受取つた三十圓を、自分が何う消費してしまつたかの問題に就て考へさせられた。

今から一箇月餘り前、彼はある知人に頼まれて其男の經營する雜誌に長い原稿を書いた。それ迄細かいノートより外に何も作る必要のなかつた彼に取つての此の文章は、違つた方面に働いた

彼の頭腦の最初の試みに過ぎなかつた。彼はたゞ筆の先に滴る面白い氣分に驅られた。彼の心は全く報酬を豫期してゐなかつた。依頼者が原稿料を彼の前に置いた時、彼は意外なものを拾つた様に喜んだ。

兼てからわが座敷の如何にも殺風景なのを苦に病んでゐた彼は、すぐ團子坂にある唐木の指物師の所へ行つて、紫檀の懸額を一枚作らせた。彼はその中に、支那から歸つた友達に貰つた北魏の二十品といふ石摺のうちにある一つを擇り出して入れた。それから其額を環の着いた細長い胡麻竹の下へ振ら下げて、床の間の釘へ懸けた。竹に丸味があるので壁に落付かないせい、額は静かな時でも斜に傾いた。

彼は又團子坂を下りて谷中の方へ上つて行つた。さうして其處にある陶器店から一個の花瓶を買つて來た。花瓶は朱色であつた。中に薄い黄で大きな草花が描かれてゐた。高さは一尺餘りであつた。彼はすぐそれを床の間の上へ載せた。大きな花瓶とふら／＼する比較的小さい懸額とは何うしても釣合が取れなかつた。彼は少し失望したやうな眼をして此の不調和な配合を眺めた。けれども丸で何にも無いよりは増しだと考へた。趣味に贅澤をいふ餘裕のない彼は、不満足のうち

ちに満足しなければならなかつた。

彼は又本郷通りにある一軒の呉服屋へ行つて反物を買つた。織物に就いて何の知識もない彼はたゞ番頭が見せて呉れるものうちから、好い加減な選擇をした。それは無暗に光る緋であつた。幼稚な彼の眼には光らないものより光るものの方が上等に見えた。番頭に揃ひの羽織と着物を拵へるべく勧められた彼は、遂に一匹の伊勢崎銘仙を抱へて店を出た。其伊勢崎銘仙といふ名前さへ彼はそれ迄つひぞ聞いた事がなかつた。

是等の物を買ひ調へた彼は毫も他人に就いて考へなかつた。新しく生れる子供さへ眼中になかつた。自分より困つてゐる人の生活などはてんから忘れてゐた。俗社會の義理を過重する姉に比べて見ると、彼は憐なものに對する好意すら失つてゐた。

「さう損をして迄も義理が盡されるのは偉いね。然し姉は生れ付いての見榮坊なんだから、仕方がない。偉くない方がまだ増しだらう」

「親切氣は丸でないんでせうか」

「左右さな」

健三は一寸考へなければならなかつた。姉は親切氣のある女に違ひなかつた。「ことによると己の方が不人情に出来てゐるかも知れない」

八十七

此會話がまだ健三の記憶を新しく彩つてゐた頃、彼はお常から第二回の訪問を受けた。

先達て見た時と略同じやうに粗末な服装をしてゐる彼女の恰好は、寒さと共に襦袢胴着の類でも重ねたのだらう、前よりは益々丸まづちくなつてゐた。健三は客のために出した火鉢をすぐ其の方へ押し遣つた。

「いえもう御構ひ下さいませぬ。今日は大分御暖かで御座いますから」

外部には穩かな日が、障子に嵌めた硝子越に薄く光つてゐた。

「あなたは年を取つて段々御肥りになるやうですわね」

「え、御蔭さまで身體の方はまことに丈夫で御座います」

「そりや結構です」

「其代り身上の方はたゞ瘦せる一方で」

健三には老後になつてから斯うむく／＼肥る人の健康が疑はれた。少なくとも不自然に思はれた。何處か不氣味に見える處もあつた。

「酒でも飲むんぢやなからうか」

斯んな推察さへ彼の胸を横切つた。

お常の肌身に着けてゐるものは悉く古びてゐた。幾度水を潜つたか分らない其着物なり羽織なりは、何處かに絹の光が残つてゐるやうで、又變にごつ／＼してゐた。たゞ何んなに時代を食つても、綺麗に洗張が出来てゐる所に彼女の氣性が見える丈であつた。健三は丸いながら如何にも窮屈さうな其人の姿を眺めて、彼女の生活状態と彼女の口に距離のない事を知つた。

「何處を見ても困る人だらけで弱りますわね」

「此方などが困つてゐらしつちやあ、世の中に困らないものは一人も御座いません」

健三は辯解する氣にさへならなかつた。彼はすぐ考へた。

「此人は己を自分より金持と思つてゐるやうに、己を自分より丈夫だとも思つてゐるのだらう」

近頃の健三は實際健康を損なつてゐた。それを自覺しつゝ、彼は醫者にも診て貰はなかつた。友達にも話さなかつた。たゞ一人で不愉快を忍んでゐた。然し身體の未來を想像するたびに彼はむしやくいやした。或時は他が自分を斯んなに弱くしてしまつたのだといふ様な氣を起して、相手のないのに腹を立てた。

「年が若くつて起居に不自由さへなければ丈夫だと思ふんだらう。門構の宅に住んで下女さへ使つてゐれば金でもあると考へるやうに」

健三は黙つてお常の顔を眺めてゐた。同時に彼は新しく床の間に飾られた花瓶と其後に懸つてゐる懸額とを眺めた。近いうちに袖を通すべきびかくする反物も彼の心の中にあつた。彼は何故此年寄に對して同情を起し得ないのだらうかと怪しんだ。

「ことによると己の方が不人情なかも知れない」

彼は姉の上に加へた評をもう一遍腹の中で繰返した。さうして「何不人情でも構ふものか」といふ答へを得た。

お常は自分の厄介になつてゐる娘婿の事に就いて色々な話を始めた。世間一般によく見る通り、其人の手腕がすぐ彼女の問題になつた。彼女の手腕といふのは、つまり月々入る金の意味で、其金より外に人間の價値を定めるものは、彼女に取つて、廣い世界に一つも見當らないらしかつた。

「何しろ取高が少ないものですから仕方が御座いませぬ。もう少し稼いで呉れると好いのですけれど」

彼女は自分の娘婿を捉まへて愚圖だとも無能だとも云はない代りに、毎月彼の勞力が産み出す、収入の高を健三の前に並べて見せた。恰も物指で反物の寸法さへ計れば、縮柄だの地質だのは、丸で問題にならないと云つた風に。

生憎健三はさうした尺度で自分を計つて貰ひたくない商賣をしてゐる男であつた。彼は冷淡に彼女の不平を聞き流さなければならなかつた。

八十八

好い加減な時分に彼は立つて書齋に入つた。机の上に載せてある紙入を取つて、そつと中を改

めると、一枚の五圓札があつた。彼はそれを手に握つた儘元の座敷へ歸つて、お常の前へ置いた。

「失禮ですがこれで俵へでも乗つて行つて下さい」

「そんな御心配を掛けては濟みません。さういふ積で上つたのでは御座いませんから」

彼女は辭退の言葉と共に紙幣を受け納めて懐へ入れた。

小遣を遣る時の健三が此前と同じ挨拶を用ひたやうに、それを貰ふお常の辭令も最初と全く違はなかつた。其上偶然にも五圓といふ金高さへ一致してゐた。

「此次來た時に、もし五圓札が無かつたら何うしやう」

健三の紙入がそれ丈の實質で始終充たされてゐない事は其所有主の彼に知れてゐるばかりで、お常に分る筈がなかつた。三度目に來るお常を豫想した彼が、三度目に遣る五圓を豫想する譯に行かなかつた時、彼は不圖馬鹿々々しくなつた。

「是からあの人が來ると、何時でも五圓遣らなければならぬやうな氣がする。つまり姉が要らざる義理立をするのと同じ事なのかしら」

自分の關係した事ぢやないと云つた風に火熨斗を動かして居た細君は、手を休めずに斯ういつ

た。

「無いときは遣らないでも好いぢやありませんか。何もさう見榮を張る必要はないんだから」

「無い時に遣らうつたつて、遣れないのは分つてるさ」

二人の間答はすぐ途切てしまつた。消えかゝつた炭を火熨斗から火鉢へ移す音が其間に聞こえた。

「何うして又今日は五圓入つてゐたんです。貴夫の紙入に」

健三は床の間に釣り合はない大きな朱色の花瓶を買ふのに四圓いくらか拂つた。懸額を眺へるとき五圓なにかしか取られた。指物師が百圓に負けて置くから買はないかと云つた立派な紫檀の書棚をじろく見ながら、彼は其二十分の一にも足らない代價を大事さうに懐中から出して匠人の手に渡した。彼はまたびか／＼する一匹の伊勢崎銘仙を買ふのに十圓餘りを費やした。友達から受取つた原稿料が斯う形を變へたあとに、手垢の付いた五圓札がたつた一枚残つたのである。

「實はまだ買ひたいものがあるんだがな」

「何をお買ひになる積だつたの」

健三は細君の前に特別な品物の名前を擧げる事が出来なかつた。

「澤山あるんだ」

慾に際限のない彼の言葉は簡單であつた。夫と懸け離れた好尚を有つてゐる細君は、それ以上追窮する面倒を省いた代りに、外の質問を彼に掛けた。

「あの御婆さんは御姉さんなんぞより餘程落ち付いてゐるのね。あれぢや島田つて人と宅で落ち合つても、さう喧嘩もしないでせう」

「落ち合はないからまだ仕合せなんだ。二人が一所の座敷で顔を見合せでもして見るがいゝ、それこそ堪らないや。一人づゝ相手にしてゐるんでさへ澤山な所へ持つて来て」

「今でも矢つ張喧嘩が始まるでせうか」

「喧嘩は兎に角、己の方が厭ぢやないか」

「二人ともまだ知らないやうね。片つ方が宅へ来る事を」

「何うだか」

島田はかつてお常の事を口にしなかつた。お常も健三の豫期に反して、島田に就ては何にも語

らなかつた。

「あの御婆さんの方がまだ彼の人より好いでせう」

「何うして」

「五圓貫ふと黙つて歸つて行くから」

島田の請求慾の訪問毎に増長するのに比べると、お常の態度は尋常に違なかつた。

八十九

日ならず鼻の下の長い島田の顔が又健三の座敷に現れた時、彼はすぐお常の事を聯想した。

彼等だつて生れ付いての敵同志でない以上、仲の好い昔もあつたに違ひない。他から爪に灯を點すやうだと云はれるのも構はずに、金ばかり溜めた當時は、何んなに楽しかつたらう。何んな未來の希望に支配されてゐたらう。彼等にとつて睦まじさの唯一の記念とも見るべき其金が何處かへ飛んで行つてしまつた後、彼等は夢のやうな自分達の過去を、果して何う眺めてゐるだらう。

健三はもう少してお常の話を島田にする所であつた。然し過去に無感覚な表情しか有たない島田の顔は、何事も覚えてゐないやうに鈍かつた。昔の憎悪、古い愛執、そんなものは當時の金と共に彼の心から消え失せて仕舞つたとしか思はれなかつた。

彼は腰から煙草入を出して、刻み煙草を雁首へ詰めた。吸殻を落すときには、左の掌で煙管を受けて、火鉢の縁を敲かなかつた。脂が溜つてゐると見えて、吸ふ時にじゅく音が出た。彼は無言で懷中を探つた。それから健三の方を向いた。

「少し紙はありませんか、生憎煙管が詰つて」

彼は健三から受取つた半紙を割いて小撚を拵へた。それで二遍も三遍も羅字の中を掃除した。彼は斯ういふ事をするのに最も馴れた人であつた。健三は黙つて其手際を見てゐた。

「段々暮になるんで嘸御忙しいでせう」

彼は疏通の好くなつた煙管をふつくくと心持好ささうに吹きながら斯う云つた。

「我々の家業は暮も正月もありません。年が年中同じ事です」

「そりや結構だ。大抵の人はさうは行きませんよ」

島田がまだ何か云はうとしてゐるうちに、奥で子供が泣き出した。

「おや赤ん坊のやうですね」

「え、つい此間生れたばかりです」

「そりや何うも。些とも知りませんでした。男ですか女ですか」

「女です」

「へえ、失禮だが是で幾人目ですか」

島田は色々な事を訊いた。それに相當な受應をしてゐる健三の胸に何んな考へが浮かんでゐるか丸で氣が付かなかつた。

出産率が殖えると死亡率も増すといふ統計上の議論を、つい四五日前ある外國の雑誌で讀んだ健三は、其時赤ん坊が何處かで一人生れれば、年寄が一人何處かで死ぬものだといふやうな理窟とも空想とも付かない變な事を考へてゐた。

「つまり身代りに誰か死ななければならぬのだ」

彼の觀念は夢のやうにぼんやりしてゐた。詩として彼の頭をぼうつと侵す丈であつた。それを

もつと明瞭になる迄理解の力で押し詰めて行けば、其身代りは取も直さず赤ん坊の母親に違なかつた。次には赤ん坊の父親でもあつた。けれども今の健三は其處迄行く氣はなかつた。たゞ自分の前にゐる老人にだけ意味のある眼を注いだ。何の爲に生きてゐるか殆ど意義の認めやうのない此年寄は、身代りとして最も適當な人間に違なかつた。

「何ういふ譯で斯う丈夫なのだらう」

健三は殆ど自分の想像の残酷さ加減さへ忘れてしまつた。さうして人並でないわが健康状態に就いては、毫も責任がないものゝ如き忌々しさを感じた。其時島田は彼に向つて突然斯う云つた。

「お縫もとう／＼亡くなつてね。御祝儀は濟んだが」

迎も助からないといふ事丈は、脊髄病といふ名前から推して、とうに承知してゐたやうなもの、改まつてさう云はれて見ると、健三も急に氣の毒になつた。

「さうですか。可愛想に」

「なに病氣が病氣だから迎も癒りつこないんです」

島田は平然としてゐた。死ぬのが當り前だといつたやうに煙草の輪を吹いた。

九十

然し此不幸な女の死に伴つて起る經濟上の影響は、島田に取つて死そのものよりも遙に重大であつた。健三の豫想はすぐ事實となつて彼の前に現れなければならなかつた。

「それに就て是非一つ聞いて貰はないと困る事があるんですが」

此處迄來て健三の顔を見た島田の様子は緊張してゐた。健三は聽かない先から其後を推察する事が出來た。

「又金でせう」

「まあ左右で。お縫が死んだんで、柴野とお藤との縁が切れちまつたもんだから、もう今迄のやうに月々送らせる譯に行かなくなつたんでね」

島田の言葉は變にぞんざいになつたり、又鄭寧になつたりした。

「今迄は金鷄勳章の年金だけはちゃん／＼と此方へ來たんですがね。それが急に無くなると、

丸で目的が外れる様な始末で、私も困るんです」

彼はまた調子を改めた。

「兎に角斯うなつちや、お前を措いてもう外に世話をして貰ふ人は誰れもありやしない。だから何うかして呉れなくちや困る」

「さう他にのし懸つて來たつて仕方がありません。今の私にはそれ丈の事をしなければならぬ因縁も何もないんだから」

島田は凝と健三の顔を見た。半ば探りを入れるやうな、半ば弱いものを脅かすやうな其眼付は、單に相手の心を激昂させる丈であつた。健三の態度から深入の危険を知つた島田は、すぐ問題を區切つて小さくした。

「永い間の事は又緩々お話しをするとして、ちや此急場丈でも一つ」

健三には何ういふ急場が彼等の間に持ち上つてゐるのか解らなかつた。

「此の暮を越さなくちやならないんだ。何處の宅だつて暮になりや百と二百と纏まつた金の要るのは當り前だらう」

健三は勝手にしろといふ氣に成た。

「私にそんな金はありませんよ」

「笑談云つちや不可ない。是丈の構をしてゐて、其位の融通が利かないなんて、そんな筈はあるもんか」

「有つても無くつても、無いから無いといふ丈の話です」

「ちや云ふが、お前の収入は月に八百圓あるさうぢやないか」

健三は此無茶苦茶な言掛りに怒らされるよりは寧ろ驚かされた。

「八百圓だらうが千圓だらうが、私の収入は私の収入です。貴方の關係した事ぢやありません」

島田は其處迄來て黙つた。健三の答へが自分の豫期に外れたといふやうな風も見えた。づうづうしい割に頭の發達してゐない彼は、それ以上相手を何うする事も出来なかつた。

「ちやいくら困つても助けて呉れないと云ふんですね」

「えゝ、もう一文も上ません」

島田は立ち上つた。沓脱へ下りて、開けた格子を締める時に、彼は又振り返つた。

「もう参上りませんから」

最後であるらしい言葉を一句遺した彼の眼は暗い中に輝いた。健三は敷居の上に立つて明かに其の眼を見下した。然し彼はその輝きのうちに何等の凄さも怖ろしさも又不気味さも認めなかつた。彼自身の眸から出る怒りと不快とは優にそれらの襲撃を跳ね返すに十分であつた。

細君は遠くから暗に健三の氣色を窺つた。

「一體何うしたんです」

「勝手にするが好いや」

「また御金でも呉れろつて來たんですか」

「誰が遣るもんか」

細君は微笑しながら、そつと夫を眺めるやうな態度を見せた。

「あの御婆さんの方が細く長く續くからまだ安全ね」

「島田の方だつて、是で片付くもんかね」

健三は吐出すやうに斯う云つて、來るべき次の幕さへ頭の中に豫想した。

九十一

同時に今迄眠つてゐた記憶も呼び覺まされずには濟まなかつた。彼は始めて新しい世界に臨む人の鋭い眼をもつて、實家へ引き取られた遠い昔を鮮明かに眺めた。

實家の父に取つての健三は、小さな一個の邪魔物であつた。何しに斯んな出來損ひが舞ひ込んで來たかといふ顔付をした父は、殆ど子としての待遇を彼に與へなかつた。今迄と打つて變つた父の此態度が、生の父に對する健三の愛情を、根こぎにして枯らしつくした。彼は養父母の手前始終自分に對してにこ／＼してゐた父と、厄介物を背負ひ込んでからすぐ慳貪に調子を改めた父とを比較して一度は驚いた。次には愛想をつかした。然し彼はまだ悲觀する事を知らなかつた。發育に伴ふ彼の生氣は、いくら抑へ付けられても、下からむく／＼と頭を擡げた。彼は遂に憂鬱にならずに濟んだ。

子供を澤山有つてゐた彼の父は、毫も健三に依怙の氣がなかつた。今に世話にならうといふ下心のないのに、金を掛けるのは一錢でも惜しかつた。繋がる親子の縁で仕方なしに引き取つたや

うなものを、飯を食はせる以外に、面倒を見て遣るのは、たゞ損になる丈であつた。

其上肝心の本人は歸つて來ても籍は復らなかつた。いくら實家で丹精して育て上たにした所で、いざといふ時に、又伴れて行かれ、ば夫迄であつた。

「食はず丈は仕方がないから食はして遣る。然し其外の事は此方ぢや構へない。先方であるのが當然だ」

父の理窟は斯うであつた。

島田は又島田で自分に都合の宜い方からばかり事件の成行を觀望してゐた。

「なに實家へ預けて置きさへすれば何うにかするだらう。其内健三が一人前になつて少しでも働けるやうになつたら、其時表沙汰にしてゞも此方へ奪還くつてしまへば夫迄だ」

健三は海にも住めなかつた。山にも居られなかつた。兩方から突き返されて、兩方の間をまごまごしてゐた。同時に海のものも食ひ、時には山のものにも手を出した。

實父から見ても養父から見ても、彼は人間ではなかつた。寧ろ物品であつた。たゞ實父が我樂多として彼を取り扱つたのに對して、養父には今に何かの役に立て、遣らうといふ目算がある丈

であつた。

「もう此方へ引き取つて、給仕でも何でもさせるから左右思ふが可い」

健三が或日養家を訪問した時に、島田は何かの序に斯んな事を云つた。健三は驚いて逃げ歸つた。酷薄といふ感じが子供心に淡い恐ろしさを興へた。其時の彼は幾歳だつたか能く覚えてゐないけれども、何でも長い間の修業をして立派な人間になつて世間に出なければならぬといふ慾が、もう十分萌してゐる頃であつた。

「給仕になんぞされては大變だ」

彼は心のうちで何遍も同じ言葉を繰り返した。幸ひにして其言葉は徒勞に繰り返されなかつた。彼は何うか斯うか給仕にならずに濟んだ。

「然し今の自分は何うして出來上つたのだらう」

彼は斯う考へると不思議でならなかつた。其不思議のうちには、自分の周囲と能く闘ひ終せたものだといふ誇りも大分交つてゐた。さうしてまだ出來上らないものを、既に出來上つたやうに見る得意も無論含まれてゐた。

彼は過去と現在との對照を見た。過去が何うして此現在に發展して來たかを疑つた。しかも其現在の爲に苦しんでゐる自分には丸で氣が付かなかつた。

彼と島田との關係が破裂したのは、此現在の御蔭であつた。彼がお常を忌むのも、姉や兄と同化し得ないのも此現在の御蔭であつた。細君の父と段々離れて行くのも亦此現在の御蔭に違なかつた。一方から見ると、他と反が合はなくなるやうに、現在の自分を作り上げた彼は氣の毒なものであつた。

九十二

細君は健三に向つて云つた。――

「貴夫に氣に入る人は何うせ何處にもゐないでせうよ。世の中はみんな馬鹿ばかりですから」

健三の心は斯うした諷刺を笑つて受ける程落付いてゐなかつた。周囲の事情は雅量に乏しい彼を益々窺屈にした。

「御前は役に立ちさへすれば、人間はそれで好いと思つてゐるんだらう」

「だつて役に立たなくつちや何にもならないぢやありませんか」

生憎細君の父は役に立つ男であつた。彼女の弟もさういふ方面にだけ發達する性質であつた。これに反して健三は甚だ實用に遠い生れ付であつた。

彼には轉宅の手傳ひすら出來なかつた。大掃除の時にも彼は懷手をしたなり澄ましてゐた。行李一つ絡げるにさへ、彼は細紐を何う渡すべきものやら分らなかつた。

「男の癖に」

動かない彼は、傍のものゝ眼に、如何にも氣の利かない鈍物のやうに映つた。彼は猶更動なかつた。さうして自分の本領を益々反對の方面に移して行つた。

彼は此見地から、昔細君の弟を、自分の住んでゐる遠い田舎へ伴れて行つて教育しやうとした。其弟は健三から見ると如何にも生意氣であつた。家庭のうちを横行して誰にも遠慮會釋がなかつた。ある理學士に毎日自宅で課業の復習をして貰ふ時、彼は其人の前で構はず胡坐をかいた。又其人の名を何君くんと君づけに呼んだ。

「あれぢや仕方がない。私に御預けなさい。私が田舎へ連れて行つて育てるから」

健三の申出は細君の父によつて黙つて受け取られた。さうして黙つて捨られた。彼は眼前に横暴を恣にする我子を見て、何といふ未來の心配も抱いてゐないやうに見えた。彼ばかりか、細君の母も平氣であつた。細君も一向氣に掛ける様子がなかつた。

「若し田舎へ遣つて貴夫と衝突したり何かすると、折合が悪くなつて、後が困るから、それで已めたんださうです」

細君の辯解を聞いた時、健三は満更の嘘とも思はなかつた。けれども其他にまだ意味が残つてゐるやうにも考へた。

「馬鹿ぢやありません。そんな御世話にならなくつても大丈夫です」

周囲の様子から健三は謝絶の本意が却て此處にあるのではなからうかと推察した。

成程細君の弟は馬鹿ではなかつた。寧ろ伶俐過ぎた。健三にも其點はよく解つてゐた。彼が自分と細君の未來の爲に、彼女の弟を教育しやうとしたのは、全く見當の違つた方面にあつた。さうして遺憾ながら其方面は、今日に至る迄いまだに細君の父母にも細君にも了解されてゐなかつた。

「役に立つばかりが能ぢやない。其位の事が解らなくつて何うするんだ」

健三の言葉は勢ひ権柄づくであつた。傷けられた細君の顔には不満の色があり／＼と見えた。機嫌の直つた時細君は又健三に向つた。

「さう頭からがみ／＼云はないで、もつと解るやうに云つて聞かして下すつたら好いでせう」

「解るやうに云はうとすれば、理窟ばかり捏ね返すつていふぢやないか」

「だからもつと解り易い様に。私に解らないやうな小六づかしい理窟は已めにして」

「それぢや何うしたつて説明しやうがない。數字を使はずに算術を遣れと注文するのと同じ事だ」

「だつて貴夫の理窟は、他を捻ぢ伏せるために用ひられるとより外に考へやうのない事があるんですもの」

「御前の頭が悪いから左右思ふんだ」

「私の頭も悪いかも知れませんが、中味のない空つぽの理窟で捻ぢ伏せられるのは嫌ひですよ」

二人は又同じ輪の上をぐる／＼廻り始めた。

九十三

面と向つて夫としつくり融け合ふ事の出来ない時、細君は已を得ず彼に脊中を向けた。さうして其處に寝てゐる子供を見た。彼女は思ひ出したやうに、すぐ其子供を抱き上げた。

章魚のやうにぐにや／＼してゐる肉の塊と彼女との間には、理窟の壁も分別の牆もなかつた。自分の觸れるものが取も直さず自分のやうな氣がした。彼女は温かい心を赤ん坊の上に吐き掛けるために、唇を着けて所嫌はず接吻した。

「貴夫が私のものでなくつても、此子は私の物よ」

彼女の態度から斯うした精神が明かに讀まれた。

其赤ん坊はまだ眼鼻立さへ判明してゐなかつた。頭には何時迄待つても殆ど毛らしい毛が生えて來なかつた。公平な眼から見ると、何うしても一個の怪物であつた。

「變な子が出來たものだなあ」

健三は正直な所を云つた。

「何處の子だつて生れたては皆な此通りです」

「眞逆左右でも無からう。もう少しは整つたのも生れる筈だ」

「今に御覽なさい」

細君は左も自信のあるやうな事を云つた。健三には何といふ見當も付かなかつた。けれども彼は細君が此赤ん坊のために夜中何度となく眼を覺ますのを知つてゐた。大事な睡眠を犠牲にして、少しも不愉快な顔を見せないのも承知してゐた。彼は子供に對する母親の愛情が父親のそれに比べて何の位強いかの疑問にさへ逢着した。

四五日前少し強い地震のあつた時、臆病な彼はすぐ縁から庭へ飛下りた。彼が再び座敷へ上つて來た時、細君は思ひも掛けない非難を彼の顔に投げ付けた。

「貴夫は不人情ね。自分一人好ければ構はない氣なんだから」

何故子供の安危を自分より先に考へなかつたかといふのが細君の不平であつた。咄嗟の衝動から起つた自分の行爲に對して、斯んな批評を加へられやうとは夢にも思つてゐなかつた健三は驚

いた。

「女にはあゝいふ時でも子供の事が考へられるものかね」

「當り前ですわ」

健三は自分が如何にも不人情のやうな氣がした。

然し今の彼は我物顔に子供を抱いてゐる細君を、却て冷かに眺めた。

「譯の分らないものが、いくら束になつたつて仕様がな」

しばらくすると彼の思索がもつと廣い區域に互つて、現在から遠い未來に延びた。

「今に其子供が大きくなつて、御前から離れて行く時期が来るに極つてゐる。御前は己と離れても、子供とさへ融け合つて一つになつてゐれば、それで澤山だといふ氣でゐるらしいが、それは間違だ。今に見ろ」

書齋に落付いた時、彼の感想が又急に科學的色彩を帯び出した。

「芭蕉に實が結ると翌年から其幹は枯れて仕舞ふ。竹も同じ事である。動物のうちには子を生む爲に生きてゐるのか、死ぬ爲めに子を生むのか解らないものが幾何でもある。人間も緩慢なが

らそれに準じた法則に矢ツ張支配されてゐる。母は一旦自分の所有するあらゆるものを犠牲にして子供に生を與へた以上、また餘りのあらゆるものを犠牲にして、其生を守護しなければなるまい。彼女が天からさういふ命令を受けて此世に出たとするならば、其報酬として子供を獨占するのは當り前だ。故意といふよりも自然の現象だ」

彼は母の立場を斯う考へ盡した後、父としての自分の立場をも考へた。さうしてそれが母の場合と何う違つてゐるかに思ひ到つた時、彼は心のうちで又細君に向つて云つた。

「子供を有つた御前は仕合せである。然し其仕合せを享ける前に御前は既に多大な犠牲を拂つてゐる。是から先も御前の氣の付かない犠牲を何の位拂ふか分らない。御前は仕合せかも知れないが、實は氣の毒なものだ」

九十四

草道

年は段々暮れて行つた。寒い風の吹く中に細かい雪片がちら／＼と見え出した。子供は日に何度となく「もういくつ寝ると御正月」といふ唄をうたつた。彼等の心は彼等の口にする唱歌の通

りであつた。来るべき新年の希望に充ちてゐた。

書齋にゐる健三は時々手に洋筆を持つた儘、彼等の聲に耳を傾けた。自分にもあゝ云ふ時代があつたのかしら杯と考へた。

子供は又「旦那の嫌ひな大晦日」といふ毬歌をうたつた。健三は苦笑した。然しそれも今の自分の身の上には痛切に的中しなかつた。彼はたゞ厚い四つ折の半紙の束を、十も二十も机の上にかさねて、それを一枚毎に讀んで行く努力に悩まされてゐた。彼は讀みながら其紙へ赤い印氣で棒を引いたり丸を書いたり三角を附たりした。それから細かい數字を並べて面倒な勘定もした。

半紙に認められたものは悉く鉛筆の走り書なので、光線の暗い所では字畫さへ判然しないのが多かつた。亂暴で讀めないのも時々出て來た。疲れた眼を上げて、積み重ねた束を見る健三は落膽した。「ペネロピーの仕事」といふ英語の俚諺が何遍となく彼の口の上つた。

「何時まで経つたつて片付きやしない」

彼は折々筆を擱いて溜息をついた。

然し片付かないものは、彼の周圍前後にまだ幾何でもあつた。彼は不審な顔をして又細君の持

つて來た一枚の名刺に眼を注がなければならなかつた。

「何だい」

「島田の事に就いて一寸御目に掛りたいつていふんです」

「今差支るからつて返して呉れ」

一度立つた細君はすぐ又戻つて來た。

「何時伺つたら好いか御都合を聞かして頂きたいんですつて」

健三はそれ所ぢやないといふ顔をしながら、自分の傍に高く積み重ねた半紙の束を眺めた。細君は仕方なしに催促した。

「何と云ひませう」

「明後日の午後に來て下さいと云つて呉れ」

健三も仕方なしに時日を指定した。

仕事を中絶された彼はぼんやり煙草を吹かし始めた。所へ細君が又入つて來た。

「歸つたかい」

「え、」

細君は夫の前に廣げてある赤い印の付いた汚らしい書きものを眺めた。夜中に何度となく赤ん坊のために起こされる彼女の面倒が健三に解らないやうに、此半紙の山を綿密に読み通す夫の困難も細君には想像出来なかつた。

調べ物を度外に置いた彼女は、坐るとすぐ夫に訊ねた。――

「また何か左右云つて来る氣でせうね。執ツ濃い」

「暮のうちに何うかしやうと云ふんだらう。馬鹿らしいや」

細君はもう島田を相手にする必要がないと思つた。健三の心は却つて昔の關係上多少の金を彼に遣る方に傾いてゐた。然し話は其處迄發展する機會を得ずに餘所へ外れてしまつた。

「御前の宅の方は何うだい」

「相變らず困るんでせう」

「あの鐵道會社の社長の口はまだ出来ないのかい」

「あれは出来るんですつて。けれども左右此方の都合の好いやうに、ちよくつら一寸といふ譯

には行かないんでせう」

「此暮のうちには六づかしいかね」

「逆も」

「困るだらうね」

「困つても仕方がありませんわ。何も彼もみんな運命なんだから」

細君は割合に落付いてゐた。何事も諦めてゐるらしく見えた。

九十五

見知らない名刺の持参者が、健三の指定した通り、中一日置いて再び彼の玄關に現れた時、彼はまださぐくれた洋筆先で、粗末な半紙の上に、丸だの三角だのと色々な符徴を付けるのに忙がしかつた。彼の指頭は赤い印氣で所々汚れてゐた。彼は手も洗はずに其儘座敷へ出た。

島田のために來た其男は、前の吉田に比べると少し型を異にしてゐたが、健三から云へば、雙方共殆んど差別のない位懸け離れた人間であつた。

彼は綺の羽織に角帯を締めて白足袋を穿いてゐた。商人とも紳士とも片の付かない彼の様子なり言葉遣なりは、健三に差配といふ一種の人柄を思ひ起させた。彼は自分の身分や職業を打明ける前に、卒然として健三に訊いた。

「貴方は私の顔を覚えて御出ですか」

健三は驚ろいて其人を見た。彼の顔には何等の特徴もなかつた。強ひて云へば、今日迄たゞ世帯染みて生きて来たといふ位のものであつた。

「何うも分りませんね」

彼は勝ち誇つた人のやうに笑つた。

「さうでせう。もう忘れても好い時分ですから」

彼は區切を置いて又附け加へた。

「然し私や是でも貴方の坊ちゃん坊ちゃんて云はれた昔をまだ覚えてゐますよ」

「左右ですか」

健三は素ツ氣ない挨拶をしたなり、其人の顔を凝と見守つた。

「何うしても思ひ出せませんかね。ぢや御話しませう。私や昔島田さんが扱所を遣つてゐなすつた頃、あすこに勤めてゐたものです。ほら貴方が悪戯をして、小刀で指を切つて、大騒ぎをした事があるでせう。あの小刀は私の硯箱の中にあつたんでさあ。あの時金盥に水を取つて、貴方の指を冷したのも私ですぜ」

健三の頭には左右した事實が明らかにまだ保存されてゐた。然し今自分の前に坐つてゐる人の其時の姿などは夢にも憶ひ出せなかつた。

「その縁故で今度又私が頼まれて、島田さんの爲に上つたやうな譯合なんです」

彼は直本題に入つた。さうして健三の豫期して居た通り金の請求をし始めた。

「もう再び御宅へは伺はないと云つてますから」

「此間歸る時既に左右云つて行つたんです」

「で、何うでせう、此所いらで綺麗に片を付ける事にしたら。それでないと何時迄経つても貴方が迷惑するぎりですよ」

健三は迷惑を省いてやるから金を出せと云つた風な相手の口氣を快よく思はなかつた。

「いくら引つ懸つてゐたつて、迷惑ぢやありません。何うせ世の中の事は引つ懸りだらけなんですから。よし迷惑だとしても、出すまじき金を出す位なら、出さないで迷惑を我慢してゐた方が、私には餘程心持が好いんです」
其人はしばらく考へてゐた。少し困つたといふ様子も見えた。然しやがて口を開いた時は思ひも寄らない事を云ひ出した。

「それに貴方も御承知でせうが、離縁の際貴方から島田へ入れた書付がまだ向ふの手にありませんから、此際若干でも纏めたものを渡して、あの書付と引き替へになすつた方が好くはありませんか」

健三は其書付を慥に覚えてゐた。彼が實家へ復籍する事になつた時、島田は當人の彼から一札入れて貰ひたいと主張したので、健三の父も已を得ず、何でも好いから書いて遣れと彼に注意した。何も書く材料のない彼は仕方なしに筆を執つた。さうして今度離縁になつたに就いては、向後御互に不義理不人情な事はしたくないものだといふ意味を僅二行餘りに綴つて先方へ渡した。「あんなものは反故同然ですよ。向で持つてゐても役に立たず、私が貰つても仕方がないんだ。

もし利用出来る氣ならいくらでも利用したら好いでせう」

健三にはそんな書付を賣り付けに掛る其人の態度が猶氣に入らなかつた。

九十六

話が行き詰ると其人は休んだ。それから好い加減な時分にまた同じ問題を取り上げた。云ふ事は散漫であつた。理で押せなければ情に訴へるといふ風でもなかつた。たゞ物にさへすれば好いといふ料簡が露骨に見透かされた。收束する所なく共に動いてゐた健三は仕舞に飽きた。

「書付を買への、今に迷惑するのが厭なら金を出せのと云はれると此方でも斷るより外に仕方がありませんが、困るから何うかして貰ひたい、其代り向後一切無心がましい事は云つて來ないと保證するなら、昔の情義上少しの工面はして上げて構ひません」

「えゝそれが詰り私の來た主意なんですから、出来るなら何うかさう願ひたいもんで」

健三はそんなら何故早くさう云はないのかと思つた。同時に相手も、何故もつと早くさう云つて呉れないのかといふ顔付をした。

「ぢや何の位出して下さいませ」

健三は黙つて考へた。然し何の位が相當の處だか判明した目安の出で來やう筈はなかつた。其上成るべく少い方が彼の便宜であつた。

「まあ百圓位なものですな」

「百圓」

其人は斯う繰り返した。

「何うでせう、責めて三百圓位にして遣る譯には行きますまいか」

「出すべき理由さへあれば何百圓でも出します」

「御尤もだが、島田さんもあゝして困つてるもんだから」

「そんな事をいやあ、私だつて困つてゐます」

「さうですか」

彼の語氣は寧ろ皮肉であつた。

「元來一文も出さないと云つたつて、貴方の方ぢや何うする事も出来ないんでせう。百圓で悪

けりや御止しなさい」

相手は漸く懸引を已めた。

「ぢや兎も角も本人によくさう話して見ます。其上で又上る事にしますから、どうぞ何分其人が歸つた後で健三は細君に向つた。

「とう／＼來た」

「何うしたつて云ふんです」

「又金を取られるんだ。人さへ來れば金を取られるに極つてるから厭だ」

「馬鹿らしい」

細君は別に同情のある言葉を口へ出さなかつた。

「だつて仕方がないよ」

健三の返事も簡單であつた。彼は其所へ落付く迄の筋道を委しく細君に話してやるのさへ面倒だつた。

「そりや貴夫の御金を貴夫が御遣りになるんだから、私何も云ふ譯はありませんわ」

「金なんかあるもんか」

健三は擲き付けるやうに斯う云つて、又書齋へ入つた。其處には鉛筆で一面に汚された紙が所
所赤く染つた儘机の上で彼を待つてゐた。彼はすぐ洋筆を取り上げた。さうして既に汚れたもの
を猶更赤く汚さなければならなかつた。

客に會ふ前と會つた後との氣分の相違が、彼を不公平にしはしまいかとの恐れが彼の心に起つ
た時、彼は一旦讀み了つたものを念のため又讀んだ。それですら三時間前の彼の標準が今の標準
であるか何うか、彼には全く分らなかつた。

「神でない以上公平は保てない」

彼はあやふやな自分を辯護しながら、すん／＼眼を通し始めた。然し積重ねた半紙の束は、い
くら速力を増しても盡きる期がなかつた。漸く一組を元の様に折ると又新しく一組を開かなけれ
ばならなかつた。

「神でない以上辛抱だつてし切れない」

彼は又洋筆を放り出した。赤い印氣が血のやうに半紙の上に滲んだ。彼は帽子を被つて寒い往
來へ飛び出した。

九十七

人通りの少い町を歩いてゐる間、彼は自分の事ばかり考へた。

「御前は必竟何をしに世の中に生れて來たのだ」

彼の頭の何處かで斯ういふ質問を彼に掛けるものがあつた。彼はそれに答へたくなかつた。成
るべく返事を避けやうとした。すると其聲が猶彼を追窮し始めた。何遍でも同じ事を繰返して已
めなかつた。彼は最後に叫んだ。

「分らない」

其聲は忽ちせゝら笑つた。

「分らないのぢやあるまい。分つてゐても、其處へ行けないのだらう。途中で引懸つてゐるの
だらう」

「己の所爲ぢやない。己の所爲ぢやない」

健三は逃るやうにすん／＼歩いた。

賑やかな通りへ来た時、迎年の支度に忙しい外界は驚異に近い新しさを以て急に彼の眼を刺戟した。彼の気分は漸く變つた。

彼は客の注意を惹くために、あらゆる手段を盡して飾り立てられた店頭を、それからそれと覗き込んで歩いた。或時は自分と全く交渉のない、珊瑚樹の根懸だの、蒔繪の櫛笄だのを、硝子越に何の意味もなく長い間眺めてゐた。

「暮になると世の中の人は屹度何か買ふものかしら」

少くとも彼自身は何にも買はなかつた。細君も殆ど何にも買はないと云つて可かつた。彼の兄、彼の姉、細君の父、何れを見ても、買へるやうな餘裕のあるものは一人もなかつた。みんな年を越すのに苦しんでゐる連中ばかりであつた。中にも細君の父は一番非道さうに思はれた。

「貴族院議員になつてさへゐれば、何處でも待つて呉れるんださうですけれども」

借金取に責められてゐる父の事情を夫に打ち明けた序に、細君はかつて斯んな事を云つた。それは内閣の瓦解した當時であつた。細君の父を閑職から引張り出して、彼の辭職を餘儀なく

させた人は、自分達の退く間際に、彼を貴族院議員に推挙して、幾分か彼に對する義理を立てやうとした。然し多數の候補者の中から、限られた人員を選ばなければならなかつた總理大臣は、細君の父の名前の上に遠慮なく棒を引いてしまつた。彼はつひに選に洩れた。何かの意味で保険の付いてゐない人へのみ酷薄であつた債権者は直に彼の門に逼つた。官邸を引き拂つた時に召使の數を減らした彼は、少時として自用俵を廢した。仕舞にわが住宅を擧げて人手に渡した頃は、もう何うする事も出来なかつた。日を重ね月を追つて、益悲境に沈んで行つた。

「相場に手を出したのが悪いんですよ」

細君は斯んな事も云つた。

「御役人をしてゐる間は相場師の方で儲けさせて呉れるんですつて。だから好いけれども、一旦役を退くと、もう相場師が構つて呉れないから、みんな駄目になるんださうです」

「何の事だか要領を得ないね。だいち意味さへ解らない」

「貴方に解らなくつたつて、左右なら仕方がないぢやありませんか」

「何を云つてるんだ。それぢや相場師は決して損をしつこないものに極つちまふぢやないか。」

馬鹿な女だな」

健三は其時細君と取り換はせた談話迄憶ひ出した。

彼は不圖氣が付いた。彼と擦れ違ふ人はみんな急ぎ足に行き過ぎた。みんな忙しさうであつた。みんな一定の目的を有つてゐるらしかつた。それを一刻も早く片付けるために、せつせと活動するとしか思はれなかつた。

或者はまるで彼の存在を認めなかつた。或者は通り過ぎる時、ちよつと一瞥を興へた。

「御前は馬鹿だよ」

稀には斯んな顔付をするものさへあつた。

彼は又宅へ歸つて赤い印氣を汚ない半紙へなすくり始めた。

九十八

二三日すると島田に頼まれた男が又刺を通じて面會を求めに來た。行掛り上斷る譯に行かなかつた健三は、座敷へ出て差配じみた其人の前に再び坐るべく餘儀なくされた。

「何うも御忙しい所を度々出まして」

彼は世事慣れた男であつた。口で氣の毒さうな事をいふ割に、それ程殊勝な様子を彼の態度の何處にも現はさなかつた。

「實は此間の事を島田によく話しました所、さういふ譯なら致し方がないから、金額はそれで宜しい、其代り何うか年内に頂戴致したい、と斯ういふんですがね」

健三にはそんな見込がなかつた。

「年内たつてもう僅かの日數しかないぢやありませんか」

「だから向ふでも急ぐ様な譯でしてね」

「あれば今すぐ上げてもいいんです。然し無いんだから仕方がないぢやありませんか」

「さうですか」

二人は少時無言の儘でゐた。

「何うでせう、其處のところを一つ御奮發は願はれますまいか。私も折角斯うして忙し中を、島田さんのために、わざ／＼遣つて來たもんですから」

それは彼の勝手であつた。健三の心を動かすに足る程の手数でも面倒でもなかつた。

「御氣の毒ですが出来ませんね」

二人は又沈黙を間に置いて相對した。

「ぢや何時頃頂けるんでせう」

健三には何時といふ目的もなかつた。

「いづれ來年にでもなつたら何うにかしませう」

「私も斯うして頼まれて上つた以上、何とか向へ返事をしなくつちやなりませんから、せめて

日限でも一つ御取極めを願ひたいと思ひますが」

「御尤もです。ぢや正月一杯とでもして置きませう」

健三はそれより外に云ひやうがなかつた。相手は仕方なしに歸つて行つた。

其晩寒さと倦怠を凌ぐために蕎麥湯を拵へて貰つた健三は、どろ／＼した鼠色のものを啜りな

がら、盆を膝の上に置いて傍に坐つてゐる細君と話合つた。

「又百圓何うかしなくつちやならない」

「貴夫が遣らないでも好いものを遣るつて約束なんぞなさるから後で困るんですよ」

「遣らないでも可いだけでも、己は遣るんだ」

言葉の矛盾がすぐ細君を不快にした。

「さう依故地を仰しやれば夫迄です」

「お前は人を理窟ほいと何か何とか云つて攻撃する癖に、自分にや大變形式ばつた所のある女だ

ね」

「貴夫こそ形式が御好きなんです。何事にも理窟が先に立つんだから」

「理窟と形式とは違ふさ」

「貴夫のは同なじですよ」

「ぢや云つて聞かせるがね、己は口に文論理を有つてゐる男ぢやない。口にある論理は己の手

にも足にも、身體全體にもあるんだ」

「そんなら貴夫の理窟がさう空つぽうに見える筈がないぢやありませんか」

「空つぽうぢやないんだもの。丁度こゝろ柿の粉のやうなもので、理窟が中から白く吹き出す丈

なんだ。外部からくつ付けた砂糖とは違ふさ」

斯んな説明が既に細君には空っぽうな理窟であつた。何でも眼に見えるものを、しつかと手に掴まなくつては承知出来ない彼女は、此上夫と議論する事を好まなかつた。又しやうと思つても出来なかつた。

「御前が形式張るといふのはね。人間の内側は何うでも、外部へ出た所丈を捉まへさへすれば、それで其人間が、すぐ片付けられるものと思つてゐるからさ。丁度御前の御父さんが法律家だもんだから、證據さへなければ文句を付けられる因縁がないと考へてゐるやうなもので……」

「父はそんな事を云つた事なんぞありやしません。私だつてさう外部ばかり飾つて生きてる人間ぢやありません。貴夫が不斷からそんな僻んだ眼で他を見てゐらつしやるから……」

細君の瞼から涙がぼた／＼落ちた。云ふ事が其間に断絶した。島田に遣る百圓の話が、飛んだ方角へ外れた。さうして段々／＼こんがらかつて來た。

九十九

又二三日して細君は久し振りに外出した。

「無沙汰見舞 旁 少し歳暮に廻つて來ました」

乳呑兒を抱いた儘健三の前へ出た彼女は、寒い頬を赤くして、暖かい空氣の裡に尻を落付た。

「御前の宅は何うだい」

「別に變つた事ありません。あゝなると心配を通り越して、却つて平氣になるのかも知れませぬ」

健三は挨拶の仕様もなかつた。

「あの紫檀の机を買はないかつて云ふんですけれども、縁起が悪いから止しました」

舞葡萄とかいふ木の一枚板で中を張り詰めた其大きな唐机は、百圓以上もする見事なものであつた。かつて親類の破産者からそれを借金の抵當に取つた細君の父は、同じ運命の下に、早晚それをまた誰かに持つて行かれなければならなかつたのである。

「縁起はどうでも好いが、そんな高價いものを買ふ勇氣は當分此方にもなさうだ」
健三は苦笑し乍ら煙草を吹かした。

「さう云へば貴夫、あの人に遣る御金を比田さんから借りなくつて」
細君は藪から棒に斯な事を云つた。

「比田にそれ丈の餘裕があるのかい」

「あるのよ。比田さんは今年限り株式の方を已められたんですつて」
健三は此新らしい報知を當然とも思つた。又異様にも感じた。

「もう老朽だらうからね。然し已められれば、猶困るだらうぢやないか」

「追つては何うなるか知れないでせうけれども、差當り困るやうな事はないんですつて」

彼の辭職は自分を引き立て、呉れた重役の一人が、社と關係を絶つた事に起因してゐるらしいか
つた。けれども永年勤続して來た結果、權利として彼の手に入るべき金は、一時彼の經濟状態を
潤ほすには十分であつた。

「居食をしてゐても詰らないから、確かな人があつたら貸したいから何うか世話をして呉れつ
て、今日頼まれて來たんです」

「へえ、とうとう金貸を遣るやうになつたのかい」

健三は平生から島田の因業を嗤つてゐた比田だの姉だのを憶ひ浮べた。自分達の境遇が變ると、
昨日迄輕蔑してゐた人の眞似をして恬として氣の付かない姉夫婦は、反省の足りない點に於て寧
ろ子供染みてゐた。

「何うせ高利なんだらう」

細君は高利だか低利だか丸で知らなかつた。

「何でも旨く運轉すると月に三四十圓の利子になるから、それを二人の小遣にして、是から先
細く長く遣つて行く積だつて、御姉えさんがさう仰やいましたよ」

健三は姉のいふ利子の高から胸算用で元金を勘定して見た。

「悪くすると、又みんな損つちまふ丈だ。それより左右慾張らないで、銀行へでも預けて置いて
相當の利子を取る方が安全だかな」

「だから確な人に貸したいつて云ふんでせう」

「確な人はそんな金は借りないさ。怖いからね」

「だけど普通の利子ぢや遣つて行けないんでせう」

「それぢや已だつて借りるのは厭ださ」

「御兄いさんも困てゐらしつてよ」

比田は今後の方針を兄に打ち明けると同時に、先づ其手始として、兄に金を借て呉れと頼んだのださうである。

「馬鹿だな。金を借りて呉れ、借りて呉れつて、此方から頼む奴もないぢやないか。兄貴だつて金は欲しいだらうが、そんな剣呑な思ひ迄して借りる必要もあるまいからね」

健三は苦々しいうちにも滑稽を感じた。比田の手前勝手な氣性が此一事でもよく窺はれた。それを傍で見えて澄ましてゐる姉の料簡も彼には不可思議であつた。血が續いてゐても姉弟といふ心持は全くしなかつた。

「御前己が借りるとでも云つたのかい」

「そんな餘計な事云やしません」

百

利子の安い高いは別問題として、比田から融通して貰ふといふ事が、健三には逆も眞面目に考へられなかつた。彼は毎月若干か宛の小遣ひを姉に送る身分であつた。其姉の亭主から今度は此方で金を借りるとなると、矛盾は誰の眼にも映る位明白であつた。

「辻褃の合はない事は世の中に幾何でもあるにはあるが」

斯う云ひ掛けた彼は突然笑ひたくなつた。

「何だか變だな。考へると可笑しくなる丈だ。まあ好いや己が借りて遣らなくつても何うにかなるんだらうから」

「え、そりや借手はいくらでもあるんでせう。現にもう一口ばかり貸したんですつて。彼所
いらの待合か何かへ」

待合といふ言葉が健三の耳に猶更滑稽に響いた。彼は我を忘れたやうに笑つた。細君にも夫の姉の亭主が待合へ小金を貸したといふ事實が不調和に見えた。けれども彼女はそれを夫の名前に關はると思ふやうな性質ではなかつた。たゞ夫と一所になつて面白さうに笑つてゐた。

滑稽の感じが去つた後で反動が來た。健三は比田に就いて不愉快な昔迄思ひ出させられた。

それは彼の二番目の兄が病死する前後の事であつた。病人は平生から自分の持つてゐる兩蓋の銀側時計を弟の健三に見せて、「是を今に御前に遣らう」と殆ど口癖のやうに云つてゐた。時計を所有した経験のない若い健三は、欲しくて堪まらない其裝飾品が、何時になつたら自分の帯に巻き付けられるのだらうかと想像して、暗に未來の得意を豫算に組み込みながら、一二箇月を暮した。

病人が死んだ時、彼の細君は夫の言葉を尊重して、その時計を健三に遣るとみんなの前で明言した。一つは亡くなつた人の記念とも見るべき此品物は、不幸にして質に入れてあつた。無論健三にはそれを受出す力がなかつた。彼は義姉から所有權を譲り渡されたと同様で、肝心の時計には手も觸れる事が出来ずに幾日かを過ごした。

或日皆なが一つ所に落合つた。すると其席上で比田が問題の時計を懐中から出した。時計は見違へる様に磨かれて光つてゐた。新しい紐に珊瑚樹の珠が裝飾として付け加へられた。彼はそれを勿體らしく兄の前に置いた。

「それでは是は貴方に上げることになりますから」

傍にゐた姉も殆ど比田と同じやうな口上を述べた。

「どうも色々御手敷を掛けまして、有難う。ぢや頂戴します」

兄は禮を云つてそれを受取つた。

健三は黙つて三人の様子を見てゐた。三人は殆ど彼の其處にゐる事さへ眼中に置いてゐなかつた。仕舞迄一言も發しなかつた彼は、腹の中で甚だしい侮辱を受けたやうな心持がした。然し彼等は平氣であつた。彼等の仕打を仇敵の如く憎んだ健三も、何故彼等がそんな面中がましい事をしたのか、何うしても考へ出せなかつた。

彼は自分の權利も主張しなかつた。又説明も求めなかつた。たゞ無言のうちに愛想を盡かした。さうして親身の兄や姉に對して愛想を盡かす事が、彼等に取つて一番非道い刑罰に違なからうと判断した。

「そんな事をまだ覚えてゐらつしやるんですか。貴方も随分執念深いわね。御兄いさんが御聽きになつたら嘸御驚きなさるでせう」

細君は健三の顔を見て暗に其氣色を伺つた。健三はちつとも動かなかつた。

「執念深からうが、男らしくなからうが、事實は事實だよ。よし事實に棒を引いたつて、感情を打ち殺す譯には行かないからね。其時の感情はまだ生きてゐるんだ。生きて今でも何處かで働いてゐるんだ。己が殺しても天が復活させるから何にもならない」

「御金なんか借りさへしなきあ、それで好いぢやありませんか」

斯う云つた細君の胸には、比田達ばかりでなく、自分の事も、自分の生家の事も勘定に入れてあつた。

百一

歳が改たまつた時、健三は一夜のうちに變つた世間の外觀を、氣のなさうな顔をして眺めた。

「すべて餘計な事だ。人間の小刀細工だ」

實際彼の周圍には大晦日も元日もなかつた。悉く前の年の引續きばかりであつた。彼は人の顔を見て御目出たうといふのさへ厭になつた。そんな殊更な言葉を口にするよりも誰にも會はずに黙つてゐる方がまだ心持が好かつた。

彼は普通の服装をしてぶらりと表へ出た。成るべく新年の空氣の通はない方へ足を向けた。冬木立と荒れた畠、藁葺屋根と細い流れ、そんなものが益槍した彼の眼に入つた。然し彼は此の可憐な自然に對してももう感興を失つてゐた。

幸ひ天氣は穏かであつた。空風の吹き捲らない野面には春に似た霽が遠く懸つてゐた。其間から落ちる薄い日影もおつとりと彼の身體を包んだ。彼は人もなく路もない所へわざ／＼迷ひ込んだ。さうして融けかゝつた霜で泥だらけになつた靴の重いのに氣が付いて、しばらく足を動かさずにゐた。彼は一つ所に佇立んでゐる間に、氣分を紛らさうとして繪を描いた。然し其繪があまり不味いので、寫生は却て彼を自棄にする丈であつた。彼は重たい足を引摺つて又宅へ歸つて來た。途中で島田に遣るべき金の事を考へて、不圖何か書いて見やうといふ氣を起した。

赤い印氣で汚ない半紙をなすくる業は漸く濟んだ。新しい仕事の始まる迄にはまだ十日の間があつた。彼は其十日を利用してしようとした。彼は又洋筆を執つて原稿紙に向つた。

健康の次第に衰へつゝある不快な事實を認めながら、それに注意を拂はなかつた彼は、猛烈に働いた。恰も自分で自分の身體に反抗でもするやうに、恰もわが衛生を虐待するやうに、又己れ

の病氣に敵討でもしたいやうに。彼は血に餓ゑた。しかも他を屠る事が出来ないで已むを得ず自分の血を啜つて満足した。

豫定の枚數を書き了へた時、彼は筆を投げて疊の上に倒れた。

「あゝ、あゝ」

彼は獸と同じやうな聲を揚げた。

書いたものを金に換へる段になつて、彼は大した困難にも遭遇せず済んだ。たゞ何んな手續でそれを島田に渡して好いか一寸迷つた。直接の會見は彼も好まなかつた。向うももう參上りませんと云ひ放つた最後の言葉に對して、彼の前へ出て來る氣のない事は知れてゐた。何うしても中へ入つて取り次ぐ人の必要があつた。

「矢つ張御兄さんか比田さんに御頼みなさるより外に仕方がないでせう。今迄の行掛りもあるんだから」

「まあ左右でもするのが、一番適當な所だらう。あんまり有難くはないが。公な他人を頼む程の事でもないから」

健三は津守坂へ出掛て行つた。

「百圓遣るの」

驚いた姉は勿體なさうな眼を丸くして健三を見た。

「でも健ちゃんなんぞは顔が顔だからね。さうしみつたれた眞似も出來まいし、それにあの島田つて爺さんが、たゞの爺さんと違つて、あの通りの惡黨だから、百圓位仕方がないだらうよ」

姉は健三の腹にない事迄一人合點でべら／＼喋舌つた。

「だけどお正月早々お前さんも随分好い面の皮さね」

「好い面の皮鯉の瀧登りか」

先刻から傍に胡坐をかいて新聞を見てゐた比田は、此時始めて口を利いた。然し其言葉は姉に通じなかつた。健三にも解らなかつた。それを左も心得顔にあは／＼と笑ふ姉の方が、健三には却て可笑しかつた。

「でも健ちゃんはいね。御金を取らうとすれば幾何でも取るんだから」

「此方とは少し頭の寸法が違ふんだ。右大將頼朝公の髑髏と來てゐるんだから」

比田は變挺な事ばかり云つた。然し頼んだ事は一も二もなく引き受けて呉れた。

百二

比田と兄が揃つて健三の宅を訪問れたのは月の半ば頃であつた。松飾の取り拂はれた往來にはまだ何處となく新年の香がした。暮も春もない健三の座敷の中に坐つた二人は、落付かないやうに其處いらを見廻した。

比田は懐から書付を二枚出して健三の前に置いた。

「まあ是で漸く片が付きました」

其一枚には百圓受取つた事と、向後一切の關係を斷つといふ事が古風な文句で書いてあつた。手蹟は誰のとも判断が付かなかつたが、島田の印は確に捺してあつた。

健三は「然る上は後日に至り」とか、「後日のため誓約件の如し」とかいふ言葉を馬鹿にしながら黙讀した。

「何うも御手数數でした、ありがたう」

「斯ういふ證文さへ入れさせて置けばもう大丈夫だからね。それでないと何時迄蒼蠅く付け纏はられるか分つたもんぢやないよ。ねえ長さん」

「さうさ。是で漸く一安心出來たやうなものだ」

比田と兄の會話は少しの感銘も健三に與へなかつた。彼には遣らないでもいゝ百圓を好意的に遣つたのだといふ氣ばかり強く起つた。面倒を避けるために金の力を藉りたとは何うしても思へなかつた。

彼は無言の儘もう一枚の書付を開いて、其處に自分が復籍する時島田に送つた文言を見出した。「私儀今般貴家御離縁に相成、實父より養育料差出しに就ては、今後とも互に不實不人情に相成ざる様心掛度と存い」

健三には意味も論理も能く解らなかつた。

「それを賣り付けやうといふのが向うの腹さね」

「つまり百圓で買つて遣つたやうなものだね」

比田と兄は又話し合つた。健三は其間に言葉を挟むのさへ厭だつた。

二人が歸つたあとで、細君は夫の前に置いてある二通の書付を開いて見た。

「此方の方は蟲が食つてますね」

「反故だよ。何にもならないもんだ。破いて紙屑籠へ入れてしまへ」

「わざ／＼破かなくつても好いでせう」

健三は其儘席を立つた。再び顔を合はせた時、彼は細君に向つて訊いた。――

「先刻の書付は何うしたい」

「筆筒の抽斗に仕舞つて置きました」

彼女は大事なものでも保存するやうな口振で斯う答へた。健三は彼女の所置を咎めもしない代りに、賞める氣にもならなかつた。

「まあ好かつた。あの人だけは是で片が付いて」

細君は安心したと云はぬばかりの表情を見せた。

「何が片付いたつて」

「でも、あゝして證文を取つて置けば、それで大丈夫でせう。もう來る事も出來ないし、來た

つて構ひ付けなければ夫迄ぢやありませんか」

「そりや今迄だつて同じ事だよ。左右しやうと思へば何時でも出來たんだから」

「だけど、あゝして書いたものを此方の手に入れて置くと大變違ひますわ」

「安心するかね」

「えゝ安心よ。すつかり片付いちやつたんですもの」

「まだ中々片付きやしないよ」

「何うして」

「片付いたのは上部丈ぢやないか。だから御前は形式張つた女だといふんだ」

細君の顔には不審と反抗の色が見えた。

「ぢや何うすれば本當に片付くんです」

「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一遍起つた事は何時迄も續くのさ。たゞ色色な形に變るから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」

健三の口調は吐き出す様に苦々しかつた。細君は黙つて赤ん坊を抱上げた。

解
説

「お、好い子だく。御父さまの仰しやる事は何だかちつとも分りやしないわね」
細君は斯う云ひく、幾度か赤い頬に接吻した。

『心』解説

『心』は大正三年四月二十日から同じ八月十一日まで、百十回に互つて、東西の朝日新聞に連載された。漱石四十八の年の事である。「今度は短篇をいくつか書いて見たいと思ひます、その一つ一つには違つた名をつけて行く積ですが豫告の必要上全體の題が御入用かとも存じます故それを『心』と致して置きます。」と、漱石自身、當時の東京朝日の社會部長に宛てて書いてゐるやうに、漱石は初め是を、例へば『彼岸過迄』だの『行人』だのとは少し違つた意味で、幾つかの短篇を繋げ合せて、一つの全體として、仕立て上げる氣でゐたらしかつた。然るに段段書き込んで行く内に、その幾つかの短篇のうちの一つとして受胎された『先生の遺書』だけで、優に百回の上を出てしまつた。それで漱石は、筆を擱いた。

漱石はともすると、初めの豫定よりも、書き込んで行く内に、長くなり勝ちな作家であつた。『坑夫』は凡そ三十回といふ豫定で書き出されたものである。然し出來上がったものは、九十六

回、正に豫定の三倍以上の長さになつた。「先生の遺書」が、凡そ何回位の豫定であつたのかは、今から憶測する手懸りが無い。然し全體としての見當が凡そ百回内外であるといふ事は、既に入社の際からきまつてゐた事である以上、その中で幾つかの短篇が書かれる筈であつたとすれば、そのうちの一つに割り振られた回数、長くて三十回を出ない筈でなければならぬ。それが此所では、百十回になつてゐるのである。是は恐らく「坑夫」の場合よりも、遂に長くなつたものであるに違ひない。漱石はそれに、初め全體の爲めに選んだ『心』といふ名前をつけ、同じ年の十月、「箱、表紙、見返し、扉、一切合切自分の考案で自分で手を下して」、岩波書店から、半ば自費出版の形で、單行本として出版した。（是が是までの全集の表紙と見返しとに應用されてゐる事は、説明するまでもないであらう）。のみならず漱石は、岩波書店主人の懇請を容れて、「己の心を捕へんと欲する人々に、人間の心を捕へ得たる此作物を奨む。」といふ、廣告文をさへ書き與へた。——『先生の遺書』以外の、漱石の頭の中の、他の幾つかの短篇がどうなつたかは、我我には分からない。

勿論『心』の中には、『先生と私』と、『両親と私』と、『先生と遺書』との、三つの短篇が含まれてゐる。然し『先生と私』や『両親と私』は、言はば『先生と遺書』の爲に存在する、短篇である。それ自身獨立して、『先生と遺書』とともに『心』の中で鼎立するほどの、重さを持つてゐるものではない。『先生と私』では、私と稱する、先生を愛する弟子が、弟子の眼をもつて見た先生の姿が、主として外から描き出される。もしくは、怖ろしい過去を持つた先生の、現在の斷面が、何の説明もなしに描き出される。『両親と私』で描き出されてゐるものは、その同じ私と稱する人間が、父危篤の電報で郷里に呼び返されて、其所で經驗する、両親との交渉である。此所では、私は先生のそばを離れる。然し子である私は、父の病床に侍しながら、その對照として、絶えず先生の事を思ひ浮かべ、事に肉體上の父を批評しつつ、精神上の父としての、先生に對する思慕の情を深くするのである。此所では先生は、直接には、我我の眼の前に現はれない。然し先生は、私の頭の中に、絶えず影を落すものとして、間接には、常に我我の眼の前にある。——元來『先生と遺書』といふやうな、自分自身の特殊な體驗を相手の前に披瀝し悉さうとするものは、深刻であるだけに、一本調子になり易い。漱石は、自分の創作の主目的たる『先生と遺書』が、とかく一本調子になり勝ちなのを防ぎつつ、且つ讀者の興味を最後の『先生と遺書』の上に集注させつつ、その『先生と遺書』の引出役として、これらの短篇を用ひたもののやうである。

その上、構成的に言へば、『先生と私』に於ける先生が、自ら自らの命を斷つ事を決心し、それを遂行する前に、自分を愛する弟子の爲めに、自分の遺書を書き得る爲めには、それ相當の時日と機縁とを必要とする。同時にそれらのものは、出來得るならば、私が先生のそばを長い間離れ

てゐる、期間内に置かれる必要があつた。その期間が此所では丁度、私が父の病氣で故郷に歸つてゐる期間、即ち『兩親と私』の期間に宛てられてゐるのである。

その期間の内に、明治天皇の崩御と、乃木大將の殉死と、當時國民を震撼した、二大事件が報じられた。『兩親と私』に於いて、普通一般の忠良な臣民として、明治天皇の崩御を哀悼し奉つた父は、同じく普通一般の忠良な臣民として、乃木大將の殉死を哀悼する。私はそれを、そばについて見てゐる。然もその同じ二つの大事件に遭遇した先生は、明治とともに生れ、明治とともに育つて來た一臣民として、明治天皇の崩御とともに、自分の時代も亦幕が閉ぢられたのだと感じ、且つ、嘗て西南の役で敵に軍旗を奪はれた申譯に、とうに死ぬべき命を今日まで長らへてゐたのだと言つて、その明治天皇に殉じまつた乃木大將に刺激されて、嘗て自分の犯した罪の贖ひに、今こそ自分の命を絶つべきであると、覺悟の腹をきめるのである。明治末期から大正初頭へかけてのこの二大事件は、かうして父と先生とによつて、劇しい對照をなして受けとられる。『兩親と私』に於いて、自分の父がそれらの報知を、いかに受けとつたかを見てゐた私は、次いで受けとつた「先生の遺書」によつて、先生がそれらのものを、いかに受けとつたかを、告げ知らされる。この意味に於いて『兩親と私』は、『先生と私』とともに、單に『先生と遺書』の引出役を勤めるのみならず、『先生と遺書』を左右から照し出す、二つの照明燈の役目をも勤めてゐる

と言つて可いであらう。その點では是は、寧ろ『行人』の構成の、繼續である。

もつとも『行人』の『塵勞』では、主人公一郎の描寫は、無論一郎の内部に深く感情を移入し、尊敬と愛情とをもつて、その内部を他に傳へようとした描寫ではあつても、所詮他人から眺めた一郎の描寫であるのに外ならなかつた。然るに『心』の『先生と遺書』では、先生自身が、自分の犯した罪と、その罪から來た自分の悩みとを、直接に、相手に告白するのである。その點では是は、反つて『行人』の一つ前の、『彼岸過迄』の『須永の話』に比すべきであるに違ひない。然し『須永の話』では、須永の過去に對する疑ひと、その疑から來る現在の悩みとが、友人の前に打ち明けられるに止まつて、其所には須永の罪は、少しも懺悔されてゐない。假に『須永の話』の中で、何等かの意味で罪の名に値ひするものがあつたとしても、それは須永が、自分の妻にしようともしてゐない千代子に對して、不可思議な嫉妬を感じるのみならず、千代子のお婿さんの候補者に對して、相手をも自分をも不快にする、自分の卑しさを暴露したといふ點にある位のものである。然も須永は、直ぐにその場から、引き返して來てゐる。然るに『心』の先生は、直ぐにその場から引き返さなかつたのみならず、一層その方向に深入りして、自分の卑しさ醜さを、徹底的に暴露するのである。さうして先生は、その自分の卑しさ醜さの爲めに、竟に相手の運命に狂ひをさへも興へ、一方ではそれを悪い事であると氣がついてゐながら、なほ且つその場で、

自分の卑しき醜さに打ち克つ事が出来なかつたのである。——『彼岸過迄』の須永の問題が、『行人』の一郎に来て、更に深められたと言ひ得るならば、『心』の先生の問題は、須永も一郎も知らない、假令知つてゐたとしても、竟に是ほどの深さに於いて経験する事の出来なかつた、深刻な事實の経験から生れ出た、問題であると言ひ得るであらう。『心』の中の先生は、自分の中に動く嫉妬に策勵されて、自分の最も親しい、最も尊敬する、高貴な友人を賣り、死に至らしめ、さうして自分は戀の勝利者としての、自覺に酔つてゐたのだからである。さうしてその事實が、次第に先生の心を蝕み始めるのだからである。

勿論三百代言的に言へば、先生は必ずしも、その友人Kを殺したのではないと、言へない事はないのかも知れない。先生がお嬢さんを自分のものにする爲に、競争相手であるKの急所を突いて、Kが自分と競争する事を沮んだといふ事は、事實であつた。また先生がKの先き廻りをして、奥さんに向つて、お嬢さんを下さいと申し込んだ事にも、疑ひがない。然しその爲めだけで、果してKが自刃したかどうかには、疑問の餘地がまだ十分あると、言へば言へなくもないやうである。然し先生にとつて重大な事は、自分が、自分の最も尊敬する、最も親しい友人の戀愛の、競争相手となつたといふ事、その爲め、高貴に戀愛してゐる、高貴な相手の、丁度その高貴な所につけ入つて、相手を手も足も出せない位置に置いたといふ事、のみならずその相手を出し抜いて、

陰でこそその仕事をして、自分だけが得をしようとしたといふ事、——一口に言へば、自分がさういふ、さもしい、見下げ果てた人間に、いつのまにか成り下がつたといふ事であつた。殊に相手は、自刃してしまつたのである。假令相手が、その爲めだけで自刃したのではなかつたとしても、自分が、高貴なものを世の中から滅ぼし去る、重なる機縁となつたといふ自覺だけからでも、先生が自分を、赦すべからざる罪人であると感じるのは、當然の事であつた。

そのみではない。相手は、自分がお嬢さんをもらふ事に話がきまつたといふ事を、奥さんの口からはつきり聞いたあとで、自刃してゐるのである。是は先生にとつて、戀愛の爲めに、自分の最も尊敬する、最も親しい友人を賣るのみならず、その友人を殺す事を敢てしたものであるのに外ならなかつた。クリストを賣つたユダが赦すべからざる罪人であるならば、先生はユダよりも、もつと赦すべからざる罪人でなければならぬ。なぜなら先生は、常に高貴な友人の、自分に對する高貴な信頼を裏切つたのみならず、その高貴を利用して、積極的に友人に働きかけ、竟にその友人を滅ぼし去つたのだからである。——少くとも『心』の中の先生はさう感じ、さうしてその感じの爲めに爾後の生活を蝕まれ、永久の梅雨空を背負つてあるく、贖ひの道を踏むべく餘儀なくされるのである。

先生は、戀愛の爲めに嫉妬し、嫉妬の爲めに己を卑くし、己を卑くした爲めに罪を犯した。そ

の點で先生は、少くとも、精神上の大罪人である。是は言ふまでもない。然し先生は、躬を以つて、その罪を贖つた。其所に先生の高貴な所はあつた。寧ろ先生は、その高貴の故に、一旦の過誤を、その一生を費して償はなければならなかつたのだと、言つても可いであらう。自分の罪を罪と意識し、さうしてその罪の意識を、一生を通じて取り失ふ事がないといふ事は、高貴な人間でなければ、到底不可能の事だからである。事實先生は、自分がお嬢さんをもらふ事になつたといふ事を、奥さんがKに報告したのだと聞いたあとで、それがもう二日ばかり前の事であつたにも拘はらず、その間にKが自分に對して、少しも變つた様子を見せなかつた事を反省して、「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」と、はつきり感じ、さうして「其時さぞKが輕蔑してゐる事だらうと思つて、一人で顔を赧らめ」たとさへ言つてゐるのである。先生が當時、自分は策略では勝つても人間としては負けたのだと感じたといふ事、それだから相手は、さぞ自分を輕蔑してゐる事だらうと思つて、一人で顔を赧らめたといふ事は、既に當時先生の中に、十分高貴なものが存在してゐたといふ事を證明する。

然しまだ年が若かつた當時の先生は、自分の中の高貴なものが、折角自分の非をはつきり指摘してくれても、すぐその場でKの前に出て、潔く自分の非を詫びるに足るだけの、勇氣を持つてゐなかつた。もしくは當時の先生には、餘りに邪魔な「私」があり過ぎた。入らざる己惚があり

過ぎた。それだから先生は、すぐそのあとで、當時の自分の事を、「然し今更Kの前に出て、恥を搔かせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。」と告白してゐるのである。さうして先生が、「進まうか止さうかと考へ」あぐんだ末、「兎も角も翌日迄待たうと決心」してゐるうちに、Kは突然、その晩自殺してしまふのである。隣室にゐて、事後にその事を初めて知つた先生が、動顛したのは、無理もない。然しその動顛に際しても先生は、「ついに私を忘れる事が出来」なかつた。先生はKの机の上の、自分に宛てた手紙を、夢中で封を切つて、「一寸眼を通した丈で、まづ助かつたと思」つた。さうしてそれを封に入れて、「わざとそれを皆なの眼に着くやうに、元の通り机の上に置」いて、暫くたつてから、奥さんをKの部屋へ連れて來るのである。——なんにも知らない奥さんは、先生が自分の前に手をついて、「濟みません。私が悪かつたのです。あなたにも御嬢さんにも濟まない事になりました。」と、先生自身の言葉を借りれば、「私の自然が平生の私を出し抜いてふら／＼と懺悔の口を開かした」にも拘はらず、それに深い意味があるのだなどとは、夢にも氣がつかず、ただ普通の感傷として聞き流して、従容として、あとの始末をつけてしまふ。そのお蔭で先生は、誰からも疑はれる事なしに、お嬢さんと一緒になる事が出來た。然しそのお蔭で先生はまた、自分の背中には到底背負ひ切れないほどの、罪の重荷を、一生背負つてあるかなくてはならない事になるのである。

○先生の中の高貴なものは——先生の中の「人間」的なものは——先生の中の「自然」は、先生をして、「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」と反省せしめた。また先生をして、奥さんの前に手をつけて、「濟みません。私が悪かつたのです。あなたにも御嬢さんにも濟まない事になりました。」と、謝罪せしめた。然し先生の中に荒れ狂つてゐた業火は、先生の中に動いてゐる、高貴な「自然」に猿轡を箝めて、思ひのままに、荒れ狂つた。然し一度その業火が荒れ狂つてしまふや否や、先生の中の高貴な「自然」は、次第にその活力を回復して、改めて先生、非を責め始める。先生は、省みて、自分のKに對する態度が、徹頭徹尾、卑劣で、醜陋で、欺瞞と誑詐とに充ちてゐて、少しも男らしいもしくは「人間」らしい所がなかつた事を、はつきり認識し始める。

○それまでの先生には、「金」によつて人を裏切る、親身の伯父を代表者とする、人類への愛想づかしこそはあつたが、然し先生には、なほ、「金」に害はれる事のない自分自身と、自分自身を取り巻く友情との上に、明るい、希望に充ちた、信頼があつた。然るにその自分が、「戀」の爲めには、一朝にして「私」だらけとなり、嫉妬し、策を弄し、陰險になり、自分の最も尊敬する、最も親しい友人を賣るほどの大罪を敢てして、少しも憚る所がなかつたのである。是は、他人への愛想づかしどころではない。自分の方がもつと愛想のつきる、見下げ果てた人間だつたといふ事

實の、慘澹たる認識である。先生はかうして、自分自身に對する信頼も希望も執著も、凡そ人間の「私」が據り所とし得るあらゆるものを、自分の中から、根こそぎ捨ててしまはなければならなかつた。それを捨ててしまつた先生の世界は、暗澹たる世界であつた。また荒涼たる世界であつた。その、地獄の果のやうな世界の中を、先生は、死に至るまで、たつた一人で、煢然として歩いて行くのである。——讀者はその姿から放射される、倫理的な、崇高な光に、心を撃たれる。

大正二年九月十六日から、「行人」の續稿として、最後の『塵勞』が新聞に載り始めた。さうしてそれは、同じく十一月十五日に至つて完結した。丁度その途中の、十月五日に、漱石は和辻哲郎に宛てて、「私が高等學校にゐた時分は世間全體が癪に障つてたまりませんでした。その爲にからだを滅茶苦茶に破壊して仕舞ひました。だからからも好かれて貰ひたく思ひませんでした。私は高等學校で教へてゐる間たゞの一時間も學生から敬愛を受けて然るべき教師の態度を有つてゐたといふ自覺はありませんでした。従つてあなたのやうな人が校内にゐやうとは何うしても思へなかつたのです。けれどもあなたのいふ様に冷淡な人間では決してなかつたのです。冷淡な人間なら、あゝ肝癪は起しません。／私は今道に入らうと心掛けてゐます。たとひ漠然たる言葉にせよ道に入らうと心掛けるものは冷淡ではありません、冷淡で道に入れるものはありません。」と書いた。然もその漱石は、大正四年六月十五日、丁度『道草』が新聞に載り始めてから十二日目に、

武者小路實篤にあてて、「武者小路さん。氣に入らない事、癢に障る事、憤慨すべき事は塵芥の如く澤山あります。それを清める事は人間の力で出来ません。それと戦ふよりもそれをゆるす事が人間として立派なものならば、出来る丈そちらの方の修養をお互にしたいと思ひますがどうですか。／＼私は年に合せて氣の若い方ですが、近來漸くそつちの方角に足を向け出しました。時勢は私よりも先に立つてゐます。あなたがそつちへ眼をつけるやうになるのは今の私よりもすつと若い時分の事だらうと信じます。」と書いてゐる。この『塵勞』執筆中の漱石の心境と、『道草』執筆中の漱石の心境との間に一線を引いて、その一線の上に『心』を置いて見るならば、我我は『心』執筆中の漱石の心境を具體的に想像する事が出来るとともに、『心』が漱石の生活建築に於いて占める位置、並びに『心』が『行人』に次ぎ『道草』に先き立つ事の意味を、可也具體的に把握する事が出来るのではないかと思はれる。漱石が「戦ふ」事から「ゆるす事」へ移つて行つた、その移り行きを最も圓滑ならしめるものが、この『心』なのである。

『行人』の一郎は、どうしても相手を「ゆるす事」が出来ないのである。「それを清め」「それと戦ふ」より外に、どうする事も出来ないのである。然も『行人』の一郎が「それを清め」「それと戦ふ」はうとした相手は、主として自分の妻君の、自分に對する態度であつたのに外ならなかつた。『行人』の一郎にとつて、全人類を代表する者は、自分の妻君であつたと言つても、敢て過

言ではない。高貴で、純粹で、一向きで、鋭い一郎は、自分の妻君の自分に對する態度の中に、冷刻で残忍で不純で技巧的なものを發見して、それが元來彼女の本性から來るものか、それとも彼女の何等かの意圖から來るものか、その正體をしかと突きとめて見なければ、落つく事が出来ないのである。然も妻君の態度は、一郎がその正體を攫まうとして、肉薄すれば肉薄するほど、何か海鼠のやうにぐなくなして、一郎に何の手徹へをも與へる事がないのである。一郎は焦り出す。一郎の頭は、空廻りをする機械のやうに、自分で自分のエネルギーの爲めに火を發し、獨りでに破壊し滅亡しようとする。それが一層一郎をして、妻君の自分に對する態度を「ゆるし」にくする。

人は眞に相手を「ゆるす事」が出来るといふには、自分も亦相手と疚を同じうするといふ、深切な反省を持つ事が必要とする。然るに一郎には、いかなる場合でも、自分は正しいといふ、確固たる自覺があるのである。また事實一郎は、いかなる場合でも、正しいのに相違なかつた。然し一郎が正しいといふ事は、必ずしも一郎の妻君が不正であるといふ事を、意味しない。問題は其所にある。一郎の弟の見る所に従へば、一郎の妻君は、「相手から熱を與へると、^{あた}温め得る女」であるといふ。さうして別に「嬌め難い不親切や残酷心は」ありさうにも思はれないといふ。それが何所までほんとはあるかは、我我には、はつきりとは分からない。然し假令この觀察が間違ひ

のない所であつたとしても、一郎は、相手を暖める爲めに、自分から相手に熱を興へるといふやうな事を、潔しとしない人間なのである。さうして一郎は、妻君が向うから、自分に「熱を興へる」事を要求して已まない。自分の妻である以上、自分は手を拱いてゐても、妻君が向うからさうするのが、當り前であると思つてゐるのである。然も、二郎に従つて、一郎の妻君は、自發的には人に「熱を興へる」事が出来ないやうに生れついた人間であつたとすれば、一郎と一郎の妻君とは、竟に相交はる事のない並行線のやうに、何所までも離ればなれに、生活しなければならぬ運命を、初めから背負はされてゐた夫婦である筈であつた。然も一郎はそれに堪へられないのである。さうして一郎は、自分に冷淡な妻君を、自分を愚弄しもしくは自分を凌辱する、陰險で残忍な、技巧に充ちた人間ではないかとさへ、疑ひ且つ憎まうとするのである。

もしこの疑惑とこの憎悪との合理性が、何所まで押して行つても證明され得ないならば、人はその爲め、例へばストリンドベリの『父』の大尉のやうな運命に陥る事に甘んじるより外、仕方がないであらう。それでなければ、人は、自分自身の中にも亦多くの「私」があり、缺點だらけ汚染だらけである事を反省して、疑惑し憎悪する相手の病所に、思ひ遣りある寛容を持つ事を學ぶべきであるに違ひない。勿論『行人』には、その意味での解決は、取り扱はれてはゐなかつた。然し『行人』では、一郎の状態は、今にも何等かの解決の方法を講じるのでなければ、何が起つ

て来るか分からない、ぎりぎりの所まで押し詰められてゐるのである。一郎の行手にあるものは、狂か、死か、宗教かの、三つだけであつた。一郎はその事をも承知してゐた。その事を承知してゐながらもなほ一郎は、一郎獨得の「私」に執して、相手だけに、相手の態度を變更する事を、要求して已まないのである。——丁度そのアンティテーゼを形づくるものが『心』の先生である。『行人』では、一郎に従へば、罪は他人にあつて、自分にはなかつた。一郎の疑惑と憎悪との対象は、自分ではなくて、他人である。然るに『心』では、先生に従へば、罪は自分にあつて、他人にはなかつた。先生の疑惑と憎悪との対象は、他人ではなくて、自分である。『行人』の一郎は、求めて已まない。一郎には、愛が、熱が、ほしくてたまらないのである。然も一郎には、求める相手から、求めるものが、求めるやうには、興へられる事がないのである。然るに『心』では、先生は、決して求めない。求めたくてたまらなくても、決して求めようとする。のみならず先生は、奥さんは奥さん流に、私は私流に、精一杯先生を愛してゐるにも拘はらず、それに感謝は持ちながら、その愛を、存分に受け入れようとする。先生は「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人」であつた。先生の、自分で犯した過去の罪の意識が、先生自身の上に、疑惑と憎悪との眼光を、絶えず注いでゐて、先生が、いくら人間を愛せずにはゐられないと感じ

る場合でも、先生をして、自分には他人を愛する資格も他人から愛せられる資格も、ともにないのだと、諦めざるを得なくしてしまふのである。

この諦めの世界は、さうしてこの求める事のない世界は、骨に徹するほどに寒い、淋しい世界であるに相違ない。然し人は、一度自分で深切に、この世界の寒さと淋しさを嘗め悉すのでない限り、恐らく「それを清め」「それと戦」はうとする事から、眞にそれを「ゆるす事」に、移つて行く事は出来ないであらう。少くとも漱石は、それが自分の「道」であると信じて、自分の自己肯定の心を『行人』に於いて、ぎりぎりの所まで押し詰めたあとで、自分の自己否定の心を『心』に於いて、ぎりぎりの所まで押し詰めたものに相違ないのである。漱石は大正三年三月二十九日津田青楓に宛てて、「私は馬鹿に生れたせわか世の中の人間がみんないやに見えます夫から下らない不愉快な事があると夫が五日も六日も不愉快で押しに行きます、丸で梅雨の天氣が晴れないのと同じ事です自分でも厭な性分だと思ひます……世の中にすきな人は段々なくなります、さうして天と地と草と木とが美しく見えてきます、ことに此頃の春の光は甚だ好いのです、私は夫をたよりに生きてゐます」と書いてゐる。同じく大正三年四月十四日、また漱石は寺田寅彦に宛てて、「近頃は人を尋ねずあまり人も好まず何だかつまらなさうに暮し居候小説も書かねばならぬ羽目に臨みながら日一日となまけ未だに着手不仕候是も神経衰弱の結果かも知れず厄介

に候」と書いてゐる。漱石は、實生活に於いて、淋しかつた。相手に求める事の多かつた漱石は、求め求めて人間に愛想をつかしつつ、なほ人間に愛想をつかしきる事が出来ないから、淋しいのである。それだから漱石は、自ら興へるだけで満足して、相手に求める事をしない修業の爲めに、自分を『心』の先生の位置に置き、自分には他人を愛する資格も他人から愛せられる資格も、ともにないのだといふ、古寒空冷の諦めの世界を具に體驗する事によつて、この自分の淋しさを乗り切らうとしたものに違ひない。然もそれが漱石一己の「道」であるとともに、萬人に通ずる「道」であつた事は、言ふまでもない事である。

昭和十年十一月十五日

小宮豊隆

『道草』解説

漱石は『道草』に來て、初めて自叙傳小説を書いた。勿論漱石の作品は、漱石が辿つた生活の道程の、序を追うた報告であるといふ點に於いては、凡て漱石の自叙傳ならぬもの——ゲーテの意味で、漱石の大きな懺悔録の一片ならぬものはないと言つて可かつた。然し是までの漱石の作品には、主として漱石の生活が、モンタージュされて、箝め込まれる。どの作品の中にも漱石は、自分自身の生活を打ち込んだ。どの作品の主人公も、はつきり漱石の面影を、傳へてゐないものはない。そのくせどの主人公にも、それを直ちに漱石と同一視する譯には行かない、漱石とは違つた、さまざまの屬性が賦與されてゐたのである。然るに『道草』の主人公は、それをそのまま漱石と見做して、少しも差支ないほど、漱石自身を直接に、赤裸裸に表現する。少くとも『道草』の健三が體驗した所のものは、漱石自身がそのまま、自分で體驗しなかつたものは、一つもなかつたと、言つて可いのである。

説解

然しさういふ事は、『道草』に書かれてゐる事實が、『道草』の置かれてゐる特定の期間内で、細大洩らさず、客觀的に、この順序で起つたものであるといふ事を、意味しない。ゲーテは自分の自叙傳を書くに當つて、自分の日記や、自分の手紙や、その他當時の事實を精確に思ひ出させるさまざまなるものを、資料として用ひたといふが、さうまでしてさへもゲーテは、客觀的には、いろんな事實の誤謬を犯してゐる。又さういふ事の可能が、自分でも十分に豫想出來てゐたればこそ、ゲーテは自分の自叙傳に、『詩と眞實と』といふ名前を、わざわざ添へてゐるのである。ましてさういふ資料を持たず、又さういふ資料を探し集めようともせず、ただ自分の頭の中に仕舞つて置いた、自分が深切に體驗した所のものを、記憶だけに頼つて書かうとした漱石の、『道草』による自叙傳が、細大洩らさず、順序正しく、客觀的な事實と合致してゐるといふ事は、到底豫期出來る筈のものではないのである。殊に是は、小説であつた。自叙傳を書く目的で書かれた自叙傳ではなくて、小説として書かれた自叙傳であつた。是が「眞實」とともに「詩」を交へてゐるものである事は、言ふまでもない。——といふ事は然し漱石が自分で「眞實」はさうではないと承知してゐながら、自分の私からそれを枉げて、この中に「詩」を導き入れてゐるのだといふ事を、意味しない。假令此所には「詩」が混入してゐるとしても、それは漱石にとつて、主觀的には、凡て「眞實」であつたものに外ならないのである。

漱石が官命に依つて、熊本の第五高等學校からロンドンに留學し、その留學期限を了へて東京に歸つて來たのは、明治三十六年一月二十三日の事であつた。漱石は留學中、狩野亨吉・大塚保治などの友人に宛てて、連名の手紙を書き、自分の現狀を報じ、その末に、自分は歸朝しても、熊本には歸りたくない、出來るものなら東京に住む事にしたい旨の、希望を洩した。狩野亨吉と大塚保治とは、その爲め斡旋の勞をとり、漱石が歸朝するまでの内には、漱石が東京の大學と東京の高等學校とに這入る事は、ほぼ内定してゐたものらしい。漱石は熊本の方を辭して、東京に家を持つた。漱石がその千駄木の家に越して行つたのは、恐らく明治三十六年の三月の初めの事である。さうして高等學校と大學とに教鞭をとり出したのは、その年の四月の、新學期からであつた。『道草』は丁度、主人公の健三が外國留學から歸つて先で、「千駄木から追分へ出る通りを日に二遍づゝ規則のやうに往來し」てゐる所をもつて始められるのである。『道草』の中で漱石は、健三に、自分は「三十六」だと言はせてゐる。明治三十六年には、漱石は數へ年の三十七であつた。

誰でも知つてゐるやうに、漱石は明治三十八年の一月に、『ホトトギス』に『吾輩は猫である』の第一回を書き、『帝國文學』に『倫敦塔』を書き、『學燈』に『カーライル博物館』を書き、それから矢繼早に、『猫』の第二・第三・第四・第五・第六・第七・第八、『幻影の盾』、『琴のそら

音』、『一夜』、『趣味の遺傳』などと書きついで、たつた一年立つか立たない内に、一躍して第一流の大家になつてしまつた。勿論漱石にとつて、第一流の大家になるならぬは、問題ではなかつた。然し人人が自分の書くものに響きを合せ、自分の書くものから刺激と影響とを受けるといふ事實の確保は、漱石に生き甲斐を感じしめ、漱石の心持を明るくするのに、十分役立つたのは、言ふまでもない事であつた。漱石は、今まで自分の中に鬱屈して、絶えず自分を苛んでゐたものが吐き出され、是まで日の目のささない、暗いじめじめした害の中に閉ぢ込められてゐてもするやうな氣がしてゐたのが、急に眼の前が明るくなつたやうな、心の寛ろぎを感じ出したのである。『道草』が置かれた特定の期間とは、即ち漱石が、その、暗いじめじめした害の中に閉ぢ込められて、息ぐるしい月日を送らなければならなかつた期間の謂ひである。それは凡そ、漱石が留學から歸つて來て、どしどし『猫』を書き出すまでの期間、強ひて數字を用ひるとすれば、凡そ明治三十六年から明治三十八年（もしくは明治三十九年）に互る、三年間（もしくは四年間）である。漱石はそれを、健三「三十六」の年の事に、總括した。

勿論『道草』に取り扱はれてゐる事實は、必ずしもこの三年間（もしくは四年間）の事のみには限られてゐない。例へば漱石の嘗ての養父、鹽原昌之助が、人をもつて漱石の所に、纏まつた金をくれと申し込んで來たのは、明治四十二年の三月、即ち漱石が朝日新聞に入社して、既に三

つ の 長 篇 を 書 き、是 か ら そ ろ そ ろ 『 所 以 』 に 取 り か か ら う と し て ゐ る 時 分 の 事 で あ る。 漱 石 は 明 治 四 十 二 年 四 月 十 一 日 の 日 記 の 中 に、「 鹽 原 が 訴 へ る と か 騒 い で 居 る と い つ て 高 田 と 兄 が 來 る。 何 の 意 味 か 分 ら ず。 沒 常 識 の 強 慾 も の な り。 情 義 問 題 と し て 呈 出 せ る 出 金 を 拒 絶 す。 權 利 問 題 な れ ば 一 厘 も 出 ず 氣 に な ら ぬ 故 也。 自 分 は 自 分 の 權 利 を 保 持 す る 爲 に 産 を 傾 ぐ る も 辭 せ ず。 威 嚇 に 逢 ふ て は 一 厘 も 出 ず の は 御 免 な れ ば な り。」 と 書 い て ゐ る。 そ れ か ら 事 件 が だ う 經 過 し た か、 精 し い 事 は 分 か ら ない。 然 し 結 局 向 う が 折 れ て 出 て、 漱 石 が 百 圓 の 金 を 出 し、 そ れ に 對 し て 相 手 が、 今 後 金 錢 上 の 依 賴 は 勿 論、 其 他 一 切 の 關 係 を 絶 ち、 終 世 迄 御 依 賴 な ど は 申 出 で ない と い ふ 證 文 を、 漱 石 の 所 に 寄 越 し た の は、 明 治 四 十 二 年 十 一 月 二 十 八 日 の 事 で あ つ た。 従 つ て こ の 事 件 が、 漱 石 の 鬱 屈 時 代 を、 遙 に 食 み 出 し て ゐ る 事 件 で あ る と い ふ 事 は、 無 論 の 事 で あ る が、 然 し 事 實 は 漱 石 は、 そ の 期 間 に 於 い て も 亦、 こ の 過 去 の 因 縁 の 爲 め に、 多 少 遠 卷 き の 状 態 で は あ つ て も、 絶 え ず 脅 か さ れ て ゐ た の で あ る。 漱 石 が そ の 脅 か し を、 時 間 的 に、 遠 卷 の 状 態 か ら 肉 薄 の 状 態 に 縮 め、 そ の 爲 め 健 三 の 苦 い 生 活 を 一 層 苦 い も の に し た の は、 こ の 事 件 を 『 道 草 』 を 貫 ぬ く 筋 と し て 用 ひ、 こ の 事 件 に よ つ て 『 道 草 』 に 小 説 的 な 纏 ま り を 興 へ よ う と し た か ら で あ る に 外 な ら ない。 さ う し て 漱 石 は そ の 筋 の 上 に、 漱 石 の 後 の 手 紙 に あ る や う な、「 世 間 全 體 が 癩 に 障 つ て た ま ら ない、 さ う し て そ の 爲 め に 「 か ら だ を 滅 茶 苦 茶 に 破 壊 し て 仕 舞 」 つ て 省 み な か つ た 時 分 の 自 分 の 姿

を、最も壓搾した形で描き出さうとしたのである。

然しこの事件を『道草』の筋として取り上げる以上、漱石は、必然に、どうして『道草』の健三が、その嘗ての養父の島田といふ男と、さういふ因縁を結ぶに至つたかを、讀者に告げ知らせなければならなかつた。然もそれを讀者に告げ知らせるとすれば、勢ひ漱石は、健三の父の事、健三の父と島田との關係の事などに觸れなければならなかつた。同時に漱石は、現在の健三の島田に對する氣持を説明する爲めに、過去に於ける、健三と島田との關係、健三と島田の妻であるお常との關係、もしくは島田とお常との關係を物語る必要があつた。のみならず漱石は、健三と島田との因縁が、種種の事情から一度綺麗に切れてしまつてゐる所から、島田の不意の出現によつて、その因縁が更に新たに繋がれさうになつた時、又その因縁が、健三のはつきりした態度によつて、更に新たに絶たれさうになつた時、嘗て健三の子供の時分、健三の父とともにその事に與つた、健三の兄や健三の姉や姉婿なども亦『道草』の中に點出して、健三をしてその事に關して、それらの人人と話し合ひをさせる必要があつた。——これらの事は、當然漱石の敘述の筆を、健三の遠い過去にまで、溯らしめる。漱石は「三十六」の健三を描いてはゐるけれども、實はそれとともに、「三十六」になるまでの健三を、その周圍とともに描かなければならなかつたのである。さうして漱石はそれをする事によつて、健三がどうして現在のやうな健三になつたかを、

讀者の前に明らかにする。然も健三がどうして現在のやうな健三になつたかといふ事は、やがて漱石が、どうして當時のやうな漱石になつたかといふ事である。かうして『道草』は、漱石の自敘傳となつた。然もその自敘傳は、特別な立場から眺められた、特別な自敘傳であつた。其所には漱石の、過去の自分に對する、批評があるのである。

漱石は、朝日新聞に『道草』を連載（六月三日から九月十四日まで）する少し前、大正四年の一月十三日から二月二十三日へかけて、三十九回に互つて、同じ新聞に『硝子戸の中』を連載した。さうして漱石はその中で、自分の子供の時分の、いろんな思ひ出を書いた。初めは特にさういふものだけを書かうといふ氣持が、漱石になかつたに違ひない事は、『日記及斷片』の中の、漱石が『硝子戸の中』に書かうとしてゐた、項目の簡條書を見ても、凡そ想像する事が出来る。然るに第十四回目に、昔自分の家に泥棒が這入つた時の話の又聞を書きとめて以來、漱石の頭の中には、自分の幼時の追懷が、次第に、とめどもなく漲り出したと見えて、次ぎから次ぎへとそれが續き、仕舞ひには『硝子戸の中』は、自分の幼時の追懷だけで、持ち切るやうになつてしまつたのである。漱石には、書けばおそらくまだいくらでも、書く種は盡きなかつたに違ひない。然し『……要するに世の中は大變多事である。硝子戸の中に凝と坐つてゐる私などは一寸新聞に顔が出せないやうな氣がする。』と感じてゐた漱石は、さうさう自分の閑文字で場所を塞げるのも

悪いと思つたものか、到頭それを三十八回で打ち切つてしまつた。さうして第三十九回の結語の中で、「私は今迄他の事と私の事をごちゃ／＼に書いた。他の事を書くときには、成るべく相手の迷惑にならないやうにとの掛念があつた。私の身の上を語る時分には、却て比較的自由な空氣の中に呼吸する事が出来た。それでも私はまだ私に對して全く色氣を取り除き得る程度に達してゐなかつた。嘘を吐いて世間を欺く程の街氣がないにしても、もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の缺點を、つい發表しず仕舞つた。聖オーガスチンの懺悔、ルソ一の懺悔、オピアムイーターの懺悔、——それをいくら辿つて行つても、本當の事實は人間の力で敘述出来る筈がないと誰かが云つた事がある。況して私の書いたものは懺悔ではない。私の罪は、——もしそれを罪と云ひ得るならば、——頗る明るい處からばかり寫されてゐたらう。其處に或人は一種の不快感を感じるかも知れない。……」と書いた。これらの事は、換言すれば、漱石が『硝子戸の中』を書きながら、頻に自分の幼時を追懐したといふ事實と、その追懐を閉ぢるに際して、自分は自分に對する「色氣」を全然取り除くといふ譯に行かず、自分の「もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の缺點を、つい發表しず仕舞つた。」と感じたといふ事實とは、次いで書かれる『道草』の題材と、その題材を取り扱ふ漱石の立場とを、可也はつきり示唆してゐるものではないかと思はれる。殊に『道草』に先き立つ『心』では、主

人公の、大學卒業前後の若い時分の、底の知れない怖ろしい「私」が、假借する所なく挽り出されてゐるのである。同じ作者の「私」の別出が、その繼續として、今度は妻帯して子供もある、洋行歸りの「三十六」の主人公の上に向けられるとしても、それは少しも不思議な事ではない。憶測を逞うすれば、『硝子戸の中』で幼時を追懐する事に活らき出した漱石の心は、幼時の追懐を機縁として、過去の自分の生活を全體として振り返り、その中に出没する醜い「私」を検討しつ『道草』に於いて、自分の最も苦しかつた、それだけに又自分が最も愛著を感じてゐる時期を截り取つて来て、その上に更に鋭い検討のメスを振はうとしたものに違ひないのである。

健三の身内の者は、江戸末期の江戸の町人の空氣を吐吞して育つて來た、言はば生活の敗殘者であつた。健三は、持つて生れた自分の氣稟と、その氣稟を護り通す意志とによつて、その空氣の中からは、遙か高い所に抜けて出てゐたが、然しその健三は、自分と自分の妻のお住とを結ぶ愛と憎みとの絆の爲めに、不快な泥濘の中に脚を踏み込んで、一つ所に地團太を踏んでゐるやうな生活を續けてゐるのである。然も健三の身内の者は、お住の身内の者をも籠めて、健三の事を、洋行までして來た大學の先生として、取らうとしさへすれば直ぐいくらでも金のとれる筈のえらい人として、機會ある毎に健三の所へ來て、經濟的の援助を仰がうとする。然し健三には、妻もあれば、多勢の子供もあつた。自分の命の糧としての書籍も亦、健三は購入しなければならぬ。

教師として這入つて来る「月百二十圓」の俸給では、他人の援助どころか、健三は、到底自分の一家をさへ支へる事も出来ないのである。その爲め健三は、學校の掛け持ちをしなければならなかつた。然も健三には、長い間かかつて完成を期してゐる、畢生の事業としての、自分自身の著述があつた。のみならず健三には、さういふ著述の完成よりも前に、自分自身の内面の要求として、人生に對する自分の態度を確立するといふ、もつと直接なもつと焦眉の、大問題があつた。健三は、その爲め、自分のからだに二つあり、自分の一日が四十八時間あつても、なほ時間が足りないと思はれるほど、時間を惜まなければならなかつた。その事は必然に健三を、自分の家庭から截り放した。自分の家庭から截り放され、自分の家に住んでゐながら、宿無しのやうに孤獨でゐなければならぬといふ事は、然し、愛なしには、もしくは暖か味なしには、生きて行く事の出来ない健三にとつて、到底堪へられない事であつた。然も健三は、『行人』の一郎と同じやうに、自分が愛に餓えてゐるからと言つて、必要な場合、自分から進んで、相手から愛を絞りに出す事の出来ない、假令出来ても、それを潔しとしない性格の持主であつた。同時に健三の妻君のお住は亦、一郎の妻君と同じやうに、こつちから熱を與へない限り、いつまでたつても暖まる事のない、——少くとも健三の眼には、冷淡で、横著で、しぶとくて、技巧だらけの女だとしか見えない、種類の女であつた。かうして健三とお住とは、お住がヒステリーに罹つたやうな時を除いては、決して魂と魂とを直下に觸れ合はせる、平和な安怡な生活を送る事がないのである。それがじりじりしてゐる健三を、特にじりじりさせる。健三は、自分の子供が縁日から買つて来て、縁側に竝べてゐる植木鉢を、一つ一つ庭に蹴とばして、その毀れて行くのを見ながら、せめて自分の痛癢をはかさうとする、憫れな、デスペレートな心持にさへなつた。まつたく『道草』の健三の心は、「世間全體が癩に障つてたまら」ない、その爲め自分のからだを「滅茶苦茶に破壊して仕舞」つて省みないほど、つきつめた、暗い心持で一杯になつてゐたのである。

然し『道草』の作者漱石は、健三のさういふ生活を描きながら、決してその健三と、同じレベルの上に立つ事がなかつた。この事が『道草』を特に注目すべきものにする。——健三は正に、正しいには違ひないのである。健三は、『行人』の一郎が正しい如くに、正しい。然し健三は、自分の正しさを信じ、自分の正しさを主張するに際して、少しも相手の立場に思ひ遣りを持たない、我儘で、得手勝手で、性急である所に、正しからざるものを藏してゐた。健三の「私」は、十分な反省なしに、自分を正しいとする點にある。もしくは自分の正しさを極端に一途に主張しすぎる點にある。漱石は『道草』で、健三の純粹で、一向きで、自分が正しいと信じる事を突貫的に貫ぬき通さうとする氣象には同情するが、然しその爲め健三が性急になり、偏執し、盲目となつて、露骨に「私」を發揮して省みない所を、健三の缺點として指摘する事を、決して忘れないの

である。例へば『道草』第十の、健三が熱を出して寝てゐる場面である。――

「あなた何うなすつたんです」

「風邪を引いたんだつて、醫者が云ふぢやないか」

「そりや解つてます」

會話はそれで途切れてしまつた。細君は厭な顔をしてそれぎり部屋を出て行つた。健三は手を鳴らして又細君を呼び戻した。

「己が何うしたといふんだい」

「何うしたつて、――あなたが御病氣だから、私だつて斯うして氷嚢を更へたり、藥を注いだりして上げるんぢやありませんか。それを彼方へ行けの、邪魔だのつて、あんまり……」

細君は後を云はずに下を向いた。

「そんな事を云つた覚えはない」

「そりや熱の高い時仰しやつた事ですから、多分覚えちや居らつしやらないでせう。けれども平生からさう考へてさへ居らつしやらなければ、いくら病氣だつて、そんな事を仰しやる譯がないと思ひますわ」

斯んな場合に健三は細君の言葉の奥に果してどの位な眞實が潜んで居るだらうかと反省して

見るよりも、すぐ頭の力で彼女を抑へつけたがる男であつた。事實の問題を離れて、單に論理の上から行くと、細君の方が此場合も負であつた。熱に浮かされた時、魔睡藥に酔つた時、もしくは夢を見る時、人間は必ずしも自分の思つてゐる事ばかり物語るとは限らないのだから。然しさうした論理は決して細君の心を服するに足らなかつた。

「よござんす。何うせあなたは私を下女同様に取り扱ふ積で居らつしやるんだから。自分一人さへ好ければ構はないと思つて、……」

健三は座を立つた細君の後姿を腹立たしさうに見送つた。彼は論理の權威で自己を伴つてゐる事には丸で氣が付かなかつた。學問の力で鍛へ上げた彼の頭から見ると、この明白な論理に心底から大人しく従ひ得ない細君は、全くの解らずやに違なかつた。

また例へば『道草』第五十四である。――

健三の氣分にも上り下りがあつた。出任せにもせよ細君の心を休めるやうな事ばかりは云つてゐなかつた。時によると、不快さうに寐てゐる彼女の體たらくが癩に障つて堪らなくなつた。枕元に突つ立つた儘、わざと慳貪に要らざる用を命じて見たりした。

細君も動かかなかつた。大きな腹を疊へ着けたなり打つとも蹴るとも勝手にしろといふ態度をとつた。平生からあまり口數を利かない彼女は益沈黙を守つて、それが夫の氣を焦立たせるの

を目の前に見ながら澄ましてゐた。

「詰りしぶといのだ」

健三の胸には斯んな言葉が細君の凡ての特色でもあるかのやうに深く刻み付けられた。彼は外の事を丸で忘れて仕舞はなければならなかつた。しぶといといふ觀念丈があらゆる注意の焦點になつて來た。彼は餘所を眞闇にして置いて、出来る丈強烈な憎惡の光を此四字の上に投げ懸けた。細君は又魚か蛇のやうに黙つて其憎惡を受取つた。従つて人目には、細君が何時でも品格のある女として映る代りに、夫は何うしても氣違染みた癩癩持として評價されなければならなかつた。

「貴夫がさう邪慳になさると、また歇私的里を起しますよ」

細君の眼からは時々斯な光が出た。何ういふものか健三は非道くその光を怖れた。同時に劇しくそれを惡んだ。我慢な彼は内心に無事を祈りながら、外部では強ひて勝手にしろといふ風を装つた。其強硬な態度の何處かに何時でも假裝に近い弱點があるのを細君は能く承知してゐた。

「どうせ御産で死んでしまふんだから構やしない」

彼女は健三に聞えよがしに呟いた。健三は死んぢまへと云ひたくなつた。

——勿論『道草』のお住は、『心』の奥さんのやうな、貞淑な妻君であるとは言へなかつた。のみか、或見方から言へば、健三を「氣違染みた癩癩持」にした罪の大半は、お住が負ふべきものであるのかも知れなかつた。然し漱石は、さういふお住をも愛し、お住の爲めに、健三の前に辯じ、もしくは健三をたしなめてゐるのである。漱石は此所で健三が、「細君の言葉の奥に果してどの位な眞實が潜んで居るだらうかと反省して見る」前に、「すぐ頭の力で彼女を抑へつけたがる」、その意味で健三が「論理の權威で自己を伴つてゐる事」を指摘する。又漱石は此所で健三がお住に對して、柔しい愛情を内には持つてゐるくせに、「我慢」の殻に覆はれて、それを素直に外に出さないのみならず、ある時は一國一途にお住をしぶといと感じ、「餘所を眞闇にして置いて、出来る丈強烈な憎惡の光を此四字の上に投げ懸け」る、偏執を指摘する。漱石は『行人』に於いては、自分自身を、最も多く一郎のレベルの上に置いた。従つて一郎が一郎の妻君を疑ひ且つ憎む場合には、妻君は多く、疑はれつばなし、憎まれつばなしの境遇に置かれた。妻君の肩を持つ者に、一郎の弟の二郎がゐるにはゐるが、然し年の若い二郎の辯護が、嫂の爲めにどれだけ役に立つてゐるかは、疑問である。その二郎さへある場合には、自分の嫂を、謎として考へなければならぬ。いやうな、不思議な経験をさせられるのである。讀者はお直を、結局は一郎と同じやうに、その正體を攫む事の出来ない女であると、感じるより外、致方がないに違ひない。然るに漱石は『道

草』に來て、恐らく是以上お住を愛しやうはないとさへ思はれるほどの慈愛をもつて、お住を愛してゐるのである。然もそれは單にお住のみではなかつた。漱石は健三の兄にも、姉にも、姉婿にも、お住の父にも、乃至は健三から最も憎まれてゐる筈の、島田や島田の先妻のお常にさへも、同じやうな慈愛を寄せてゐる。言はば『道草』の漱石にとつては、健三も島田も、健三夫婦も比田夫婦も、さして變りがない位の、低い所にしか立つてゐないのである。それにも拘はらず主人公の健三は、自分だけ高い所に立つてゐる氣で、「氣違染みた癩癩持」を發揮して、人生の「道草」を喰つてゐるのである。漱石は高い所からそれを見下ろしつつ、その健三の善い所と悪い所とを、まるでそれが他人でもあるやうに、公平に「私」なしに、指摘する。換言すれば漱石は此所で、自分の「もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の缺點を」、假借する所なく「發表し」て、敢て憚る所がないのである。

自分の自叙傳を書いて、自分の過去を、是ほど「色氣を取り除」いて、「私」なしに取り扱ひ得るといふ事は——もしくは、是ほど正直に、公平に、冷靜に、自分の過去の中から自分の「私」を剔出し得るといふ事は、一人の人間の仕事として、實に容易ならざる大事業ではなかつたかと思はれる。是は、正しく言へば、單なる自叙傳ではない。懺悔録といふ事を標榜しない、深刻な懺悔録である。『心』の主人公は、自分を愛する弟子の前に、自分自身の罪を懺悔した。然しこ

の懺悔は、漱石自身から言へば、言はば漱石の、エキペリメントとしての懺悔である。其所には漱石の精魂が打ち込まれてゐるには違ひなかつたが、また其所には漱石の、人間心理の把握の深さと鋭さが、明白に示されてゐるには違ひなかつたが、然しこの懺悔には、ある場合、讀者の方で、何かを補ひつつ讀んで行かなければならぬやうな、一種の間隙が感じられなくもない。然るに『道草』では、凡てのものが肉の厚みを持ち、體重を持ち、事實の強みを持つてゐる。此所では漱石自身の體驗した事が、生ま身のままで持ち出され、漱石自身がその生ま身の上にメスを振つて、思ふさま、その病根を挽り出して見せてくれるのである。然も漱石は、自分の過去の實生活を曝しものにして少しも悔いだけの、高い境地に立つてゐて、自分の死屍を、一種の微笑を湛へてさへも、解剖して見せてくれるのである。

『道草』に取り扱はれてゐる期間の漱石が、どういふ心持で生きてゐたかは、『書簡集』の中の、明治三十六年から明治三十八年（もしくは明治三十九年）へかけての、漱石の書簡を讀む事によつて、もしくはその當時書かれた『猫』を讀む事によつて、もつと精到にもつと具體的に知る事が出来るであらう。然もその當時の生活を、『道草』に於けるやうに取り扱ふといふ事は、漱石にとつて、一度『行人』を経過し、『心』を経過した後でなければ、——自分の中の「私」を積極・消極の兩方面から焚き盡した後でなければ——到底不可能の事であつたやうに思はれる。さうし

て漱石の所謂「則天去私」の世界は、漱石が『道草』の立場に立つ事が出来て始めて、その基礎を確立したと言つて可かつたのである。健三は「ゆるす事」が出来なかつたが、然し漱石は「ゆるす事」が出来てゐる。

昭和十年十一月十六日

小宮豊隆

昭和十年十一月二十五日印刷
昭和十年十二月五日發行

漱石全集第八卷

(寺島製本)

著作權者

夏目純一

編輯及發行

漱石全集刊行會

右代表者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

印刷所

東京市神田區錦町三丁目十一番地
精興社



6

692
11

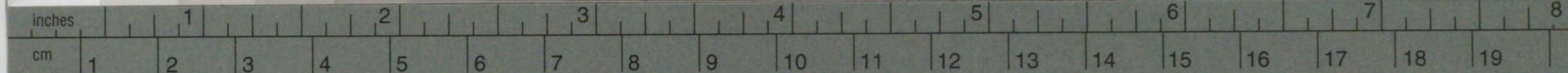


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

